

る。其名稱のみを並べても、或は國立、普通、參考、記念、學校附屬、宗教、學術協會附屬、實業、貸本、村落、巡廻、兒童、盲人、監獄、鐵道圖書館と云ふ風に、随分澤山のものである。今之を大體に於て性質の上から區別して見ると、二になる。一は參考圖書館で、他は普通圖書館である。又維持の方法より區別するときは、官立、公立、私立となるのである。又圖書館の特種の目的或は藏書の種類から分つ事も出来るのである。斯の如く圖書館にも澤山の異つた性質のものがあから、其目的、効用も種類に従つて異なるのであるが、大體の目的は如何なる事であるかと云ふと、つまり智能を啓發し、徳性を涵養し、文化を進め、社會の進歩を促すと云ふことで、學校の目的と何等異なる所がない。斯く大體の目的は學校と全く同じであるが、其目的を達する方法に於ては大に異なる所があるのである。即ち學校は一定の年齢の者を定まつたる時間に教育する機關であるに對して、圖書館は何等年齢や職業や階級に差別されぬ極めて一般的の教育機關である。又學校は或意味に於て強制的教授であるに對して、圖書館は全然自發的である。一度圖書館の門をくれば、そこで有史以來のありとあらゆる出來事も承知する事が出来るし、又偉人、豪傑、文人、雅客とも交はる事ができるし、社會百般の出來事や凡の學術技藝をも窺ふ事ができるのであるが、自ら進んで來ない人には凡の本は閉ぢられ、凡の偉人は黙して語らない。この自發的、研究的といふ事が圖書館の大切な意味である。屢我國の學校卒業者には應用の才が乏しくていかぬと云ふ非難を聞き、又我國人は一般に研究心が乏しい

といふ批評を聞く。これは餘り教授的注入的學校教育に重を置いて、自發的研究機關を無視した爲ではあるまいかと思ひます。我國の圖書館も明治三十二年勅令を以て圖書館令が發布せられて以來、漸次公私立の圖書館が設置せられて、今日では既に六百六十九と云ふ數に達した。然しながら學校の數に比したら八十分の一に過ぎない。又經費より比較すれば、學校に用ゐられて居る費用の四百分の一位である。之を歐米の學校と圖書館と殆んど同一視して居る所に較べると、甚だ情ない次第である。之を以て見れば、我國の教育機關は何となく跛足的發達をして居るやに考へられるのである。是非共今少し此一般的、自發的教育機關たる圖書館事業を促進せしめなければならぬと思ひます。

以上は圖書館の大體の任務を述べて學校と比較した次第でありますが、圖書館にも前申述べたやうに色々の種類がありますので、其種類に従つて目的や効用も自ら異なるものがあります。茲には通俗圖書館の任務及効用について申述べて見たいと思ひます。

第一に小學校の卒業生について考へて見たいと思ひます。何處の學校の卒業式に行つても、校長や其他の人の口から必ず聞く所の語があります。『汝等の今日此學校を卒業するのは、大に慶賀すべき事である然しながら此小成に安んずる事なくして益知識を磨き、修養を積まねばならぬ』と云ふ事であります。此訓示は果して如何程實行せらるゝでありませんか。毎年の小學校卒業生約百萬人の中より高等の學校に進む者は、約十五萬人であつて、八十五萬人は小學校ざりで學校を止めてしまふのであ

ります。即ち一割五分の卒業生は卒業式の訓示を實行すると致しまして、殘の八割五分の中多の者は随分怪しいのであります。其著しき證據は即ち徴兵検査の學術成績に現はれて居るのであります。半は退歩して随分甚しいのが多いといふ事でありまして。私は寧ろ斯く退歩するのが當然の事であると思ひます。小學校では主に教科書で教はつて、讀書の趣味といふ事を感じて居りません。又小學を卒業する時分迄はまだ知識慾も旺でないし、讀書の趣味が如何に生涯に必要なかといふ事も十分に解して居ないのであります。従つて學校を卒業するなり書籍を打棄て、一年二年三年と經つ間に、段々忘れてしまふのは當前の事でありまして。若し在學中から圖書館の便があつて教科書以外に面白い有益なる本を讀む便宜を與へて讀書の趣味を感ぜしめ、卒業して後もいつでも閲讀し得る便宜を與へてやりましたならば、少くとも學習したものを忘れしめないといふ効果はあると思ひます。或は其中には漸々讀書の程度を高め、研究修養を積んで行くものも出來ると思ひます。

次に中等學校に進んだものにも、同様の意味に於て稍進んだ讀書の趣味又は研究修養上の便宜を與へると云ふ事は、頗る大切であります。而して其中には色々の事情から半途にして退學しなければならぬものも、随分あります。是等の人が退學した當時、今少し勉強したいと云ふ熱心は、大したもののであります。此時に研究勉學の便を與へてやると云ふことは、随分効果のある事と思ひます。著しき例は彼米國の富豪カーチギー氏であります。彼も此境遇に置かれて、全く圖書館勉強によつて自分を磨

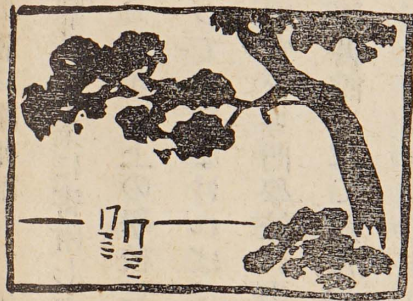
き上げたさうでありまして、其爲め非常に圖書館の効用を認め、圖書館事業に寄附する事は、各々なにと云ふ事で、既に三四年前までに圖書館事業に寄附した高が、一億圓に達したと云ふ事でありまして。

次に又中等の學校を卒業した者で、より以上の學校に進めない者が随分多いのであります。通俗圖書館は之等の人の勉學の便宜も計つてやらなければならぬ。私の地方の中學を三年前に卒業した一人の學生がありますが、親父は警察官で専門學校に出す學資を給する事が出来なかつたらしいのであります。で其青年は毎日々々私の圖書館に來て勉強して居りました。閱覽者の入館數を調べたことがあります。其青年は三ヶ月間に百七十九回來て居りました。それは午前來る、午後來る、夜も亦來ると云ふ風で、そんな回数になつたのであります。而してその青年は一年餘してから學資の都合ができました、醫學専門學校の入學試験を受けました。中學ではさう成績が優等でなかつたに拘らず、競争の激しい入學試験に四番で合格しました。是等の人の爲に圖ることも、圖書館の重要な任務の一と考へます。其他小學校の教師の爲などにも、餘程利益を與へる事が出来るのであり、尙又農工商に従事して居る人々に修養研究の便宜と機會とを十分に與へる事は、地方啓發上頗る重大なる任務であります。假令是等の人々が研究修養と云點まで進まなくても、只趣味、娛樂を與へる場所となつてもいいと思ひます。晝間實業に勞力又は奔走して居る地方の青年が、夜になると面白くない所に遊びに行く或は集つて無駄話をする代に、圖書館に小説を讀みに或は繪を見に行くといふ様な風になりまし

たならば、地方の風教を維持する上に於て少からざる効果があると思ひます。此讀書が國民一般の趣味になるといふ事は、國民の改善進歩に重大なる關係を有する事と信じます。

通俗圖書館の任務と効用を十分に述べ盡す事は、甚だ困難でありますが、大體今申述べたやうな次第であります。

今日此大切な任務を持つて居る圖書館を當地に御設立になると云ふ事は、實に結構なる御企だと考へます。御當地は前申述べたやうな色々な美點、特徴を有して居られるのでありますが、更に圖書館の設立に依つて錦上花を添へらるゝ事は疑はないのであります。御來會の有力なる諸君が十分に御奮發あつて、立派なる整頓したる圖書館を御設立あらむ事を切望する次第であります。(完)



雜 報

●銅島子爵薨去

貴族院議員錦鷗間祇候正二位勳二等子爵舊鹿島藩主鍋島直彬子は宿痼腸管狹窄病昂進のため五月二十四日より鹿島藩邸に於て坐臥せられ久布白兼行、同兼康、織田簡一、勝屋弘規、西本田玄一の五氏主治醫となり晝夜病床を離れず看護申上げ夫人諱子方を始め令嗣直繩氏夫妻永田井原山崎の各子爵家の相談役は斷へず枕頭に侍して人爲の限りを盡して看護に努めたるも遂に藥石効を奏せず六月十三日午後に至り病勢俄に險惡となり午後八時危篤に陥られ同十四日正午遂に薨去せられたり御臨終の模様は十三日午前九時過に至り子爵は豫てより期せられたるものゝ如く令嗣直繩氏を枕頭に召させられ羽織袴及び爵服、錦鷗間祇候大禮服並びに勳章を枕頭に置きさせられ家扶に命じて髭を剃らせられさらに全身を拭き藩祖忠茂公を始め歴代の藩主を祭祀せる松陰神社の奉告祭を行ふべき旨命ぜられ自から其順序を示されたるより直繩氏は憂愁の色を呈めつゝ是れを神官に傳へ神官は直に邸内に安置せる神籬の前に奉告の祝詞を奏し其聲病床に聞ゆるや子爵は身を起して極めて謹嚴の姿勢を以て最敬禮を行ひたり然るに其後の容態は頗る安靜にして漸次衰弱の度を加へざるのみならず意識も明瞭になり苦痛の様子見えざりしが子爵は遺言として「是れ見よ」と言はれしのみにて一言も口外せられず同夜八時十分に至り全く危篤の狀態に陥り其儘同一狀態を持續せられ六月十四日正午遂に薨去せられたるなり

雜 報

危篤の電報發せらるゝや東京を始め各地より見舞電報は折返しに聲を放ちて慟哭するものもあり之れが爲め中川邸は憂愁の色に包まれて明初むれば早朝より見舞の舊臣絶ゆる事なく而して薨去の旨公表せらるゝや鍋島侯、前田侯、細川侯、松平侯、池田侯及鍋島侯爵令嗣直映君、大隈伯、柳澤伯、井伊伯、堀田伯、酒井伯、阿部伯、副島伯、曾我子、大浦子、松平子、藤波子、本莊子、仙石子、毛利男、辻男、眞木男、谷森男御親戚筋より前記鍋島侯を始め鍋島直虎子、鍋島直和子、同祖母易子の方、毛利子、鍋島兩男爵、諫早男、武田中將等を始め其他新義眞言宗豊山派宗務所、同智山派宗務所、前豊山派宗務所長富田教純師、佐賀郷友青年會本支部、在京佐賀學友會、西野佐賀地方裁判所長、稻澤檢事正、野口佐賀市長、竹下聯隊區司令官、五十五聯隊將校團、生田唐津中學校長、野崎貴族院議員、齋藤宇一郎、西英太郎兩代議士等

其他數十通の弔電は頻々として雲集し鹿島町を始め附近各村落よりの甲冑者邸前に蠟集して雜踏し一面鹿島町は火の消へたる如く靜寂を極め憂愁の色に包まれ居れり

●祭料御下賜 錦鷗間祇候正二位子爵鍋島直彬氏薨去に付聖上皇后兩陛下には同子爵生前の功勞を思召され勅使を以て左の如く恩賜の御沙汰ありたり

祭 料

金一千圓

●貴族院の弔辭 貴族院にては子爵議員鍋島直彬氏郷里肥前鹿島に於て十四日逝去に付十五日左の弔辭を贈りたり

貴族院は議員錦鶴間祇候正二位勳二等子爵鍋島直彬君の長逝を追悼し恭しく弔辭を呈す

●故鍋島直彬子家系と家族 子爵家の藩祖は藤原鎌足の曾孫、左大臣魚名の遠孫、太宰少貳資經の裔鍋島平左衛門尉茂尙の孫佐賀藩祖加賀守直茂公の二男泉和守忠茂公なり慶長六年忠茂公十八歳にして主命を奉じて江戸に赴き、將軍家康公に謁し世子秀忠の侍臣となり始め下總國矢作に采邑を賜はり後慶長十四年宗家佐賀藩より封二萬石を分與せられ肥前國鹿島城主となる、忠茂は二代將軍秀忠の片諱を賜はりて改めたるものにして關ヶ原の亂後宗家の安泰を全うしたるは忠茂の格勳與つて力ありと云ふ二世忠茂、三世直朝に至り力を民政に盡し德澤普く藩政大に揚り明治四十四年特に正四位を追贈せらる、夫より、直條、直堅、直郷、直熙、直宣、直彝、直永、直春、直賢を経て子爵直彬公に至る、子爵は天保十四年十二月十一日を以て生れ安政六年封を繼ぎ藩主雲叟公の第二女にして後閑叟公の養女となられし諱子の方を室とし去明治三十年四月十六日鍋島直大侯第二子直彬を納れて養嗣子とし爲し德山藩主子爵毛利元秀氏令妹政子に配せらる御家族は子爵未亡人諱子(七十三)令嗣直彬氏(廿七)同令夫人政子(廿一)同長男直紹氏の四人なり

●故子爵官歴

一叙任從五位下備前守 萬延元年十二月十六日
一改任備中守 文久三年二月十一日
一明治二年二月版籍奉還同年六月十七日自今公卿諸侯之稱被廢改て華族と可稱旨被仰出
一鹿島藩知事被仰付候事 明治二年六月廿六日
一廢藩置縣縣知事被仰付候事 同四年七月十四日
一任侍從 同九年三月八日

一法政局出仕被仰付候事 明治九年十月十八日
一任三等侍補 同十年八月二十九日
一侍補局被廢候に付廢官 同十一年十二月二十四日
一宮内省御用掛被仰付候事 同
一但五等官に準し收拔候事
一文學御用掛被仰付候事
一ヶ月金百四十圓下賜候事
一内務省御用掛被仰付取拔準奏任候事 同十二年三月十三日
一司法省御用掛被仰付候事 同十二年三月二十九日
一任沖繩縣令 同四年四月五日
一兼任判事
一赴任以來職務終別勳候に付爲其賞金二百五十圓下賜候事 同十三年一月二十日
一特旨を以て位一級被進候事叙正五位 同十三年五月十八日
一任議官 同十四年五月十八日
一沖繩縣令同奉職中の事務引渡として同縣へ出張被仰付候事 同年五月二十一日
一特旨を以て位一級被進候事叙從四位 同年七月二十日
一叙勳三等綬賜旭日中授章 同十七年四月廿二日
一授子爵 同十九年七月八日
一叙正四位 同十九年十一月十八日
一帝室制度取調委員被仰付候事 同二十一年五月三十一日
一陸軍勅任官一等 同年六月十五日
一叙從三位 同年九月二十七日
一客歲五月以來帝室制度取調委員奉務の勞を慰せられ宮内省に於て金百圓下賜 同二十二年六月二十日
一賜憲法發布記念章 同廿二年十二月廿九日
一同爵者の選舉に依り貴族院議員に當選す 同二十三年七月十日

一元老院議員廢止に付廢官 明治二十三年十月廿日
一帝室制度取調局廢止に付委員を轉解 同年同月同日
一錦鶴間祇候仰付候事 同年十月廿日
一今般元老院廢止に付廢官の輩は總て非職と心得 同年同月同日
一在職中格別勳勵に付其賞として別紙目録の通下賜す
目録 金千圓 同廿六年五月十二日
一依願免本官 同廿七年五月二十一日
一特旨を以て位一級被進 叙正三位同廿七年五月二十一日
一第七回帝國議會召集の際勳績に付銀盃一組を賜ふ 同二十九年三月二十九日
一同爵者の選舉に依り貴族院議員に當選す 同三十年六月八日
一華族令第十八條に依り宮内省に於て五號事件第六號事件評議委員被仰付 同三十三年二月十三日
一同爵者の選舉に依り貴族院議員に當選す 同三十七年七月十日
一叙勳二等賜瑞寶章 同三十九年四月一日
一叙從二位 同四十年十二月二十一日
一同爵者の選舉に依り貴族院議員に當選す同四十四年七月十三日
一七十歳の高齡に達し左の御下賜品ありたり 同四十五年一月二十二日

一御紋附銀盃 一組
一御酒肴料 一封
一第一回帝國議會以來議員の職に在り其功諒からず依て金盃一個を賜ふ 大正三年六月十八日
一特旨を以て位一級被進叙正二位 同四年六月十二日
一特旨を以て位一級被進叙正二位 同四年六月十二日
一特旨を以て位一級被進叙正二位 同四年六月十二日

●故鍋島子爵葬儀 故鹿島舊藩主貴族院議員錦鶴間祇候正二位勳二等子爵鍋島直彬氏葬儀は六月二十一日午後一時鹿島町中

川本邸出棺菩提寺なる藤津郡古枝村黃葉宗圓福山普明寺に於て最と莊嚴に執行せられたり數日來霖雨陰々として喪に籠る本邸は一入の哀寂を添へ前日は午後より雷鳴さへ加はり猛雨沛然として至りしが當日も朝來悲雨蕭々として歇まず差池として飛び交ふ燕の影も淋し午前十時大導師たる普明寺堂頭溪道元師は紫衣に赤二十五條衣金線入の燦爛たる袈裟を纏ひ伴僧二名を伴ひ鎮龍、兩悅衆太鼓、饒鉢各衆僧を隨へて來邸、御書齋なる棺前に於て香煙焼香に次で心經一卷上來回向の後直ちに歸山し後に僧衆一同三寶齋大悲呪心經變食眞言結誦同向を終れば勅使石橋本縣知事は勅任官大禮服を着け千原屬を隨へ休憩所森田半助氏邸を出で、賜物の勅使として同邸に參向せり、當日勅使御差遣の御沙汰あるや同邸より野口善止氏祐徳軌道の貴賓車を以て武雄驛まで出迎へ森警務課長、早川、宮崎兩警部及吉田鹿島署長警衛して午前九時鹿島着千々岩英一氏の先導にて前記休憩所に入り同十一時子爵邸に參向門前には鍋島諒三郎、原田種徳兩氏出迎へ直繩氏及び永田、井原、山崎三相談役は式臺に出迎へて直ちに勅使の間に請じ此處にて勅使より御下賜の絹二疋を傳達して直ちに退出一旦休憩所に引返しフロツクコートに更めたる後本縣知事として再び參り弔問せり之より眞葬列係長愛野少佐幹旋の下に諸般の準備整ひて會葬者一同時の到るを待ちわたるが午後一時饒鉢の響き悲鳴り渡れば長き丈餘の槍造の靈柩は在郷軍人に擔はれて靜かに進發あり葬列は巡查二名を先驅とし杉浦校長の引率する鹿島中學校四五年生二百名を先頭に御先立僧、饒鉢師、散花散米、高張提灯、大旗、鉢、雜物、小幡、起龍師、傳僧、悅衆、饒鉢、太鼓に續いて御靈膳は相良驛、田中勇夫兩氏二の御膳は長島七三郎、永野靜雄兩氏、三の御膳は原忠一、平尾圭一兩氏、御盛御菓子箱は齋藤精一、千々岩英一兩氏、盛御菓子臺は立石昌保野口善止兩氏、御茶御湯は梅崎繁馬、田中鐵三郎、石丸萬吉の三氏、御酒水は北御門正夫久、布白兼武兩氏何れも舊重臣及び同家門の人々に依りて捧げられ、續い

て一對の御燭臺、生花、造花、御香爐、御香合、宮燈、紗燈、幢幡、提燈に次で錦鶏間祇候の子爵大禮服は石橋安一織田清心兩氏勳二等瑞寶章同副章は納富勳一、栗山佐一兩氏の各在郷將校捧持し、喪主直繩氏の御手添として川原、小池、大塚、栗田、最所、勝屋各新舊家職の捧げたる御香亭には「靜觀院殿止二位勳二等萬物自得大居士」と記せる白木の御位牌を安置し續いて喪主直繩氏は麻の白衣を着け徒歩肅然として進み御親族男子に次で靈柩は二十名宛交替の在郷軍人四十名に荷はれ棺側には永田佐次郎、井原喜代太郎、山崎常雄氏等三名に荷はれ棺側には永田佐次郎、井原白兼康、西平田玄一、勝屋弘親各生前御掛醫隨從し御分髪に棺には家扶酒見今朝一氏隨ひ天蓋に續いて未亡人瀧子の方女中を從へ政子令夫人は直紹君を抱き醫師久布白兼徳氏及び女中を從へ何れも下髪白綾無垢の喪服にて車にて從へ、御親族婦人、鹿島婦人會員其他御供女子、鹿城會員其他御供男子、放鳥、鹿島高等女學校職員生徒三百名に次で各分會旗を持して二十名宛總代として會葬せる鹿島町外四ヶ村在郷軍人百名を後驅とし最後一般會葬者の順序にて縣道を東に石木津橋にて右折普明寺に向へるが葬列は蜿蜒として約一里の順路に連り青年會員、小學校生徒其他一般村民は雨中沿道に堵列して葬送し中には年老けたる村翁の舊領主の薨去を悼みて在りし世の追懷に袂を絞れるあり人垣を築ける老若男女の村民は何れも眼を濕しつゝ恭しく敬禮し折々に響く引金、太鼓、饒鉢の哀音轟々として五月雨に流るゝ悲し、斯くて午後三時葬列は久保山麓なる普明寺に達し普照したる石門を潜り婆娑たる竹林に沿へる幽砌を踏みて山門を入れば式場には八間四方の比且籬を繞らして發心、修行、菩提、涅槃の四門を設け中央に白布を以て四柱を覆へる式壇を設けたるが先着の諸家御名代新義真言宗豊山派管長代理富田教純、同智山派管長代理宮崎智全兩僧正、各舊藩寺菩提寺佐賀市外高僧寺住職高僧者道樹、蓮池宗眼寺住職佐賀縣第一曹洞宗務所長正覺慈觀、八本木村泰智寺住

一同よりは大花環を供へたり因に鹿島町外四ヶ村は當日中歌舞音曲を停止して謹愼し祐德軌道會社にては葬列通行中鹿島濱間の運轉を中止して弔意を表せり

子爵葬儀餘録

靈輿と靈柩 故鍋島正二位公の葬儀に就ては永田、井原等諸氏を始め種々相談を遂げ其遺骸を納むべき靈柩と靈輿の製作に關しては子爵御病氣中より特に鹿島に在宅し居たる幸田萬次郎氏へ一任することとなりたれば幸田氏は其材料より製作に至るまで博多にて辯多として十四日より同日他急行し僅々三日間の日時を以て左記の如く靈柩と靈輿を調達せしめたり

▲靈柩 長六尺五寸、中二尺二寸、板の厚さ一寸二分とし無節の尾州檜にて作り内外の二重箱として寝格なり右無節の二尺二寸厚一寸二分の檜板は頗る稀なりと云へり

▲靈輿 長九尺、高さ六尺とし之れに二丈一尺の昇棒を附けたり、黒漆塗艶消しの鈍色にして眞鍮鍍金香葉の彫刻を爲し月屏及兩側には花香葉を浮彫り金磨きとし輿の兩側の簾には絹縹を垂れ周圍の幕には香葉を藤色の絹地に染め出したり聞かざる如くんば幸田氏等の意見に依れば今回老翁子爵の薨去は鹿島に於ける太故に、帝國民が明治天皇の崩御に對するさ一般實に空前絶後とも稱すべきを以て其華美に流るるは避くべき所なるも最も莊嚴にせざる可らずとなし斯くは取計ひたる由にて其設計を建つるに當りては其範を故伊藤公爵の國葬に用ひたる靈輿に取り傍ら喪祭事務と稱する古書等を參酌したるなりと然かも僅に三日間に成し成就せしめたるが如き其舊主公の爲め努力せしを思ふべし

▲皆な佛說下駄 葬儀の當日は朝來五月雨の降頻り道路は泥濘深く歩行に困難せるが然かも會葬者は男も女も皆な佛說下駄を穿き居たる爲め白足袋は言はずもあれ今日を晴れと着飾りたる夫人令嬢達の裾模様ある紋服を泥塗れになしたるにぞ氣の毒なる蓋し鹿

職光山覺城諸師、高等官、官公吏等は係長相長少佐以下接待員の案内にて各休憩所より堂内設けの席に着席し靈柩は山門内に安置し、御香亭のみを捧げて有邊三匝するや御位牌を安置して大高机に御靈其他の供物を献じ終つて饒鼓一通の後續齋師德興善、起齋師浦原祖真、點茶師村山靈苗、點湯師佐藤壽嶺四導師の法語焼香及心經讀誦、役僧二十餘名の三寶讀誦ありて齋大師師は知隨の拜請にて柱杖を撞いて入場、問訊の後型の如く殿かに引導を授け此間參列僧侶の一轉語あり終つて直繩氏及御遺族、親戚名代の焼香に次で縣下黃蘗宗各寺院僧侶を始め鹿島佛教會其他參列僧侶五十餘名は一齋に讀經を爲し一般會葬者の焼香終るを待ちて饗食眞言に移り最後大導師は焼香、献供、薫香、展具三禮の後結讀上來回向を終へて歸丈、時に午後五時過にして一般會葬者は之にて散會したるが引續き直ちに同墓所に於て埋棺式あり役僧は石蓋を覆ひて讀經を爲し終つて御祠堂に於て安牌直繩氏以下の禮拜ありて全く式を終るは雨に暮るゝ山門の影暗き午後七時過ぎなりき因に御分髪は同寺に安置して舊重臣交々御を爲二十四日午後一時出棺、八本木村泰智寺に於て執行せらる當日會葬者は鍋島侯、蓮池、小城兩子爵、毛利子爵、鍋島男爵、諫早男爵家各名代を始め故子爵家親族、石橋知事、同夫人、西野佐賀地方裁判所長外縣下重なる官公吏、實業家、附近郡長、郡内各町村長、佐賀郷友青年會及佐賀學友會、肥前協會々長、鹿島町外四ヶ村議員、區長、在郷軍人、青年會員、婦人會員、學校生徒、一般町村民等無慮萬餘に達し出棺前より小降となりたれば葬列を拜せんとて沿道に蟬集する老若男女數千名に上りり尙ほ石橋知事の持參せる日本赤十字社長及知事夫人の持參せる愛國婦人會長其他の弔詞及貴族院始め鍋島侯其他三百餘通の弔電は一括して式中靈前に供したるが鍋島直和子同夫人梅子、大久保教尚子、同夫人親子、本庄宗久子、同夫人孝子、松平乘長子同夫人芳子、鍋島易子、同夫人親子、井伊伯未亡人常子、阿部伯未亡人篤子等よりは各一對の造花を贈られ舊重臣

島の風習として晴天の會葬者は福草履を用ゐ雨天には佛說下駄を用ゐるを例とし高木履を穿くは失禮とすれば斯くは泥中に佛說下駄を用ゐたるなりと亦以て同地方が如何に舊君臣の情誼を存じ居るの深きかを思はしむ

石橋知事談

勅使として中川邸に參向せし石橋知事が其旅館に休憩中に於て語れり云ふを漏れ聞くに由來舊藩主と舊藩士との關係は年一年より薄らぎ行き現に福岡の如きは舊時の情誼を認め能はざるに佐賀に來れば存外舊君臣の情誼暖なるを見るに今日鹿島に入れば舊藩時代と雖も之れには過ぎざらんと思はるゝ語り頗る感歎し居られたり

▲直繩氏薨爵 故鍋島直彬子家督相續人鍋島直繩氏は七月二十日薨爵仰付けられたり

子爵逸事

子爵は舊藩時代より夙に勤王の壮志を抱かれ佐賀本藩の爲にも盡瘁せられたるが維新後帝國議會開設以來每期貴族院議員として勤續勸勵國家の爲献賛する所尠ならず特に明治九年先帝陛下の侍從に任ぜられ二十三年元老院議官廢官と共に錦鶏間祇候を仰付けられ二十三年居を舊藩邸に遷されてより議會開會中の外上京さるゝ事尠なりしが明治四十五年六月明治天皇御不例の事あるや鹿島自邸に於て所勞の爲靜養中なりし子爵は其身を忘れて屢々端座瞑目御平癒祈願を望められたるが同三十日崩御の急電に接せらるゝや痛惜哀悼の情に堪へず聲を放つて慟哭せられ其夜は禮服を着けて東北の方皇居に面し靜坐端然、一夜を徹せられ醫師の勸告を却けて直に病を冒し行李刻々東上の途に就きて殯宮に伺候せられ御大葬迄日々參候又は御通夜の勤を怠りせず御大葬後桃山御陵に參拜を了へて歸邸せられ邸内に明治天皇奉祀の祠を建立し日夜禮拜を怠らるゝ事なかりしといふ又母堂朝子刀自の在世中は子爵の孝養到らざるなく明治三十年十一月八十八の高齡を以て卒去せらるゝや哀悼の情止み難く親ら萬部經を一石一字

に書して萬部の塔を建て母堂の御菩提を申はれたりと聞く、曩に日露戦役の際に舊藩士民の従軍する者五百餘名に及ぶや家族慰問又は戦死者遺族の弔問及會葬等は一も空しくせらるゝ事なく特に木札を作り親ら「義勇奉公」の四字を書し之を各出征軍人家族に頒ち各門戸に掲げしめ一見出征軍人家族たるを表彰するに共に家族を奨励せられ凱旋に際しては一同を松蔭社に招待して盛大なる歡迎會を開き温情以て軍人一同の勞を犒はれたるが日露戦役の際に中川自邸に招きて歡迎の宴を張られたり、育英事業に就ては殆ど半生の道樂として盡されたるが鹿島高津原小學校の設立は實に縣下小學校設立の濫觴にして遠く舊藩時代に於ては藩校弘文館を建文武兩道を奨励し碩儒谷口藍田翁を聘して侍講たらしめたるのみならず藍田塾を興し又は長崎縣立中學の廢せらるゝや私費を以て中學校英語學校館を經營せられ其他勸業に於ては造林を始め各種の事業を興し鹿島が僻遠の地にして交通不便の爲め産業其他の發達を阻害する事尠からざるより井原氏其他有志に依り祐徳軌道會社創立せらるゝや自ら進んで其の株の大部分を引受けられ以て今日の隆盛を見るに至り其他鹿島銀行、肥前陶業會社の如き地方産業に關する事業に對しては常に率先して大株主たるを快諾せられ獎勵に努められたるが産業の發達と共に人材養成を急務とし鹿城會を組織して學資補助の途を講ぜられ目下同會出身にして各地に散在せる重なる人々には左の諸氏なり

法學士田澤義輔(明治神宮造幣局書記官)同朝日龍一(雜誌海外主幹)同田中鐵三郎(日本銀行在勤)同甲斐熊彦(辯護士)同松尾龍馬(郵船會社在勤)工學士岸川雄次郎(日本電氣會社技師)同森川藤次(鐵道院技師)同鍋島朝俊(生野銀山在勤)法學士若永新太郎(駿豆電鐵會社參事)醫學士若永義太郎(東京大學病院助手)文學士梅崎玄三(唐津中學校教諭)

●勤王敬神 (永田佐次郎氏談) 子爵は安政六年御年十七歳で

封を襲がれましたが文久元年江口に參勤され大村の松林飯山(駒次郎)三河の松本奎堂(謙三郎)仙臺の岡千仞等の勤王家に會はれ御歸藩の途中伊勢迄歸られた時松本奎堂が態々御跡を慕うて來て御旅館で追ひ付き勤王報國の心事を披瀝して當時十九歳の御青年であられた直形公に臣事せんことを請ひ遂に君臣の約を結ぶに至つた。仍て奎堂も藩に隨つて來て盡すが正當であるが自分は京坂地方におゐて天下の爲に盡したいからと願つて之を許され爾來互に氣脈を通じて勤王に盡された之は佐賀本藩始め何處にも知れてゐなかつた。所で其翌々年奎堂は大和に於て討幕の旗擧げをするに云ふ事が聞えたので子爵は重臣原忠順を召されて「勤王は勤王であるが兵を擧げるには時期が尙早い、お前行つて思ひ止まらせよ」と仰せられて早速大和に遣された。原氏は子爵よりも聖堂の先輩で松林、松本や高杉晋作等と交り本藩にも功勞があり後常藩の執政となり當主を輔佐して藩校徳義館を改革し逸早く經濟學に留意して之を教ふるなど文武兩道に亘つて藩政を復興した藩の忠臣で維新後子爵が沖繩縣令となられた時隨つて書記官として磯島の島民を撫育し晩年貴族院議員となり二十七年に歿した人である。仍て原氏は大和に急行して此旨を傳ふると奎堂は「事茲に至れば主命と雖如何ともする事が出来ぬ故改めて暇を願ひ度い、而して出來るならば藩兵三百騎を貸て下さる様歸つて願うて呉れ」と云ひおまけに原氏は軍學者であつたから貴公序に陣營を敷いて置いて呉れといふ事であつた此處有様で詮方なく原氏は歸藩すると其事が忽ち佐賀本藩に知れて原氏は閉門を仰付られ松本奎堂は大和十津川で討死したが既に鹿島藩の臣下で無くなつてゐるから藩には何のあ計もなかつた其後開叟公の代理として檢察に出られる事があり副島伯が本藩を脱走した時なども最初伯は効かに鹿島に來て重なる藩士等と相談し此方から脱走した。後伯は藩則に問はれて本藩で囚はれる筈であつたが之を聞かれた子爵は自ら佐賀に出られて開叟公に説かれるには「副島が藩則を迄犯して脱走しましたら

るは天下の爲めでありませう、敵將副島一人の爲めでありませう、歟」と説かれて天下の爲めは即ち佐賀の爲め、今や天下の形勢は斯々の有様に御座りますと諄々と申上げられたので英明な開叟公は直ちに之を嘉納されて副島伯を許され江藤南白翁も同じく四はれて牢に入られたる筈の所を子爵の御蔭で赦免されたいふやうな有様で當時本藩には多少名君開叟公の聖明を褒讃する者が無いでもなかつたが叔父甥の間柄に在られた子爵が開叟公を輔けられて勤王をも勤めになつたのは事實である。其結果として子爵は開叟公の御命に依つて毎月半分宛本藩に登城され直大侯の御名代として政廳に出られた事もあつたといふ事で、御登城の時凡て船で濱と屋外津の間を往復されてゐたといふ事である、當時維新前後に亘つて徳久幸次郎(元熊本縣知事)徳久恒範氏(令弟)山中一郎、元式部官の丹羽龍之助等七八名の本藩少壯連が屢々鹿島に來て子爵と意見を交してゐた。子爵は亦非常に敬神の信念に篤く而も其敬神は根柢を國體に取られた確乎たる御信念で祐徳院は藩祖直朝公與方萬子姫の御勸請に成つた關係から特に御信仰も篤く邸内に分祀され子爵を始め奥方も常に命婦の御加護を靈感せられてゐつた。今春私が御書を頼み申した所「大日本者神國也」と書いて下された敬神勤王の御精神も偲ばれ今は私の爲には特に意味深き御形見として拜するに至つたのは返すくも残念な次第である云々

●育英道樂 (井原喜代太郎氏談) 子爵家相談役代議士井原喜

代太郎氏は慨然として子爵の平生に就て語りて曰く「子爵は至誠一貫、誠忠無比の勤王家で事皇室に關すれば聲淚共に下るゝといふ風であつた、而して獨特の華族論を持せられてあつた、それは華族は皇室の藩屏である、只華族は特に國民に率先して忠勤を拔んでればならぬ、藩屏といふ事は釐穀の下に住居を構へるといふ意味のものでは無い、只無爲徒食して東京に住し徒らに藩屏と稱す

るは無意義である、一體華族には武家華族と公卿(華族新華族も公卿華族の部類に含まれる)に別たれるが武家華族は舊藩士民を有し三百年來の情義を統一して主従一途、國家の爲めに盡さればならぬ、夫を只舊領地を離れて帝都に計り住んでゐる舊士民と接する機會が尠いから特に官職を奉じたる者は別であるが左も無い者は舊士民と力を協せて勸業、教育に盡す事が即ち武家華族の本領である」といふ御持論で元老院が廢せられ議員を免ぜられると共に憲法發布の年即ち明治二十二年御年四十七歳の時特に願はれて舊藩地に遷られたので御持論の通り一日も空しく東京に居られなかつたのである、而して勸業には特に模範造林經營の御計畫で植林を始められた令嗣には特に林業に就て専門の御教育を施され教育方面には最も御熱心に奨励された、子爵の教育御熱心は寧ろ御道樂と申上げて宜しい程で讀書、書畫の外別に何一つ御嗜好と申す程の事は無く強て道樂を云へば教育御道樂であつた、夫も廣き意味の教育で子爵の勤王報國の御精神の發露であつた事は申す迄もない事である、嘗て長崎縣立中學の廢せられた時には私費を以て中學校英語學校を經營せられ現今の鹿島中學が縣立となつた時には敷地全部を寄附され其他鹿城會を起して子弟學資補助の途を講ぜられる等自ら率先して、勸業育英の事業に盡された事實は數ふるに遑が無い、教育御熱心の一端を申すと、何處かの小學生が遠足して軍歌を歌ひながら通つて行く聲がすると家從に命じて何處の生徒かと聞かれる、家從が走り出て聽礼して復命すると呼び寄せよと仰せられ邸内に引入れて御自身で忠君愛國のお話を爲され茶菓を振舞はれる、中學生が遠足に行く時は御自身未明に起きられて御送り出られ歸校の時に態々出迎へに御出でなされる家職がお止め申上ぐると道樂だから是丈は許せと仰せられてあつた、又毎年鹿島中學の四、五年生を邸に招かれ牡丹餅會を催されるのが恒例で昨年に秋に催されたが其時は擊劍や角力等を演じ子爵からは獎勵のお訓話があり學生も交々演説して子爵は熱心に

御膳廳なされ和氣議々の裡に恒例の牡丹餅を戴くといふ愉快な御招待の會である今年からは女學校の四年生をも招かれる事になり正月に書畫會や鞠や羽子を突いて愉快に邸で遊び暮した事もありつた、公會の席に勿論村々の青年會や軍人會や其他の會合にも御出席になり精神的な話があり話題は多く蘊奥を極められた經書を基礎として之を我國體に合せ平易な説明が爲されて深く感動を與へられるのが常であつた、時には中學校に電話を掛けられて話しに行きたいが授業に妨げない時間は何時頃か唐突に思ふ立たれる事もある、平素の御起居は極めて謹嚴端正で常に袴を召されて端然と坐られ讀書や書畫の御揮毫なさる時も決して姿勢をお崩しになつた事を見受けし事はなかつた、而も御生活は質素で平民的であられるが教育其他公共事業には斯う申上げては如何であるが分に過ぎる程の御寄附を爲された事は度々であつた云々

●東京に於ける子爵 (舊本會幹事文學士下村虎六郎氏談)

東京に於ける佐賀郷友青年會は佐賀縣並に舊佐賀藩に屬した諫早深堀を併せて鍋島廿六萬石、小笠原六萬石から帝都へ笈を貢て遊學した學生の團結で年一回の神田錦輝館に於ける青年大會には鍋島侯爵、大隈、大木、副島伯爵、小笠原子爵、鹿島の老伯爵等の貴賓の臨席を乞ひ縣出身の諸名士を一堂に招じ先進と後輩と互に隔てない故郷の山川に享けた血潮を暖むる美しい會合であつた、四十一年から四十二年に涉つて此の郷友青年會の幹事であつた、佐賀中學校の下村文學士は青英を以つて半生の事業とし樂とせられたる子爵が郷黨出身の青年を熱愛せられたと云ふ事に就て語る「子爵は極端な學生御最良で三田の御屋敷に何一つ一番福の利けるものは何時でも解衣破帽の書生であつた、家令や何かの人々も子爵の心を承けて學生さへ云へば賓客扱ひにして呉れまして勿論紹介状などの面倒な手續なしで早速結構な應接に通して頂く、

子爵は遠く離れて居た愛兒を迎へた様に打ち寛いで或る時は教訓を或る時は處世の道を火の様な熱に焙かして話して下すつた。承る者は懐しい氣分の中にも何とも犯し難い威嚴に心からひれふして泌々と肝に銘じたものであるお話が濟むと、御飯でも食べて行けとの有難い仰せがある、數ある縣下名士先輩中郷黨の青年を身ならぬ私共在京中にはもう子爵は老體で議會開會中より外には大抵國ばかりであつたが夫でも錦輝館の學生大會は素より先輩諸君の出席の少ない本縣出身大學在校生を以て組織した學友會にも大抵御臨席下さつたテンプルスビーチにある七十歳近い御老體をキチンとフロックに包んで愛兒を諭す様な口調で御話し下さつた事身にかへてもと云ふ風な溫義を含んで話の一節も魂を凝めた様に生きて居たお話中鹿島藩の事に及べば子爵は慨然と感慨に堪へぬ面持で維新の變に我鹿島藩は飽迄藩政の荒廢を防がんと名臣を藩に止めてあたたら大智大才を變亂に雄飛せしめなかつた夫がため遂に現世に名を得る士を出して居ない生涯の失策唯此の事であると屢々語られた、其の直接の御高底によつた人を云へば學費の一部もしくは全部を受けた鹿城會の人達であらう、其の會員の中から田澤朝日甲斐などの諸名士が出て居るが子爵は決して其の人達に對して恩義がましい事を仰せられぬのみならず其の高等學校から大學へ入る様になつても學資を給して自由な下宿生活をさせられたもので此の鹿城會の人は勿論一般縣出身の學生は子爵を親の如くに敬し懷しんで居た」

●未亡人の斷髮 未亡人藹子の方は六月十四日頭髮を斷たれ其院號を「講昭院殿慈德明大姉」と稱し自今に講昭院殿と稱する由

●噫、老子爵 故子爵鍋島直彬氏に就き西肥日報社の峰火西

氏が同新聞紙上に其の感懷を載せたり老公の如何に謹嚴篤實の君子たりしを窺ふに足るを以て茲に之を摘録せむ

◎子爵の朗吟 明治十年前後と覺ふ老子爵が宮廷に在りて侍補に任じ先帝の左右に奉侍せらるゝ頃陛下は屢次子爵を召され頼山陽が「下筑後河」の長歌を吟せよとの御沙汰あるより子爵は天命を畏み大御前に於て朗吟に去り吟に來らるゝに其抑揚、其音吐入神の妙を得られたれば天顏殊に麗はしくわたりせられしと承はる如何に君臣の契合深かりしを推想するも畏く然かも此聖主も此名臣も今は昇天し給ひしぞ悲しき限りなる

◎孔聖の銅像 昨年の秋老子爵を中川邸に訪ひ奉りしに老子爵は直に階上の一室にて引見せらる折柄隣室は書畫の虫干をやせられけん幾百幅の書畫箱を積重ねありしが子爵自ら起つて一個の小銅像を恭しく捧げ來りて余に示し這は是れ孔子の像にして曾て大鹽後素の珍藏せし所なるが後素の死後攝津の小西某が所有に歸せしを谷口藍田が同地に遊歴せし際小西某より譲受け甚だ尊崇し居たり然るに一日此聖像を齎し來りて徐に余(子爵)に告ぐらく之を家藏として傳へんとするも子孫其器に非ずんば汚損し亡失するの虞無しとせず乃ち其保存を託せん者は吾公其人なるを思ひ斯くは持參せりて附與せられたり然れば余は先師藍田翁の附托を空ふせざらんを期し居るなりと語り給ひしことあり

◎子爵の垂教 余は子爵に文字上の知遇を辱ふし垂教を蒙りたること一再に止らず故に鹿島に於て東京に於て子爵を訪問し疑を質し益を受けたるや夥からず殊に文章を作れる際は子爵に呈示し其雌黃を乞ひたること多し子爵も亦余の不肯を棄て給はす丁寧親切に加除修正を加へ給ふを例せり憶ひ起す余が曾て鹿島に於ける興教大師遺跡保存趣意書を稿し之れが添削を乞ふや子爵は快諾せられ且つ其返稿に當りて井原喜代太郎氏を介して曰く此文章佳ならざるにあらざるも始めより假名交り文として起草せし痕跡歴然たり峰(志)は漢文の素養ある者なるに盡ぞ最初之を漢文にて草し

更に假名交り文とせざりしぞ文に骨力を帶びしめんは漢文にて作るにあり是れ該諳旨書の氣力に乏しき所以なり其由本人に傳へよとありしと井原氏は余に語り蓋し子爵の意は必ずしも悉く漢文にて稿せざる可らずとにはあらず只文章は決して苟くもすべからざるは勿論なれば最初漢文にて起稿し更に假名交りとなす程に推敲するを要すと垂教せられたるなり余は爾後此意を牢記して其垂教に乖からんと期せり嗚呼老子爵今や隔世の人たり今より何人に就て文字上の垂教を奉ぜんか余が追悼の情切なる所以也

◎忠忱と謹嚴 子爵の忠忱にして謹嚴なりしは天性と謂ふべく片時も皇室を忘れられたる事無し故に其薨去せらるゝ一兩日前家人に向て余が臨終の時到来ば必ず頭を東北の方位に向はしめよと命ぜられ家人も其言を奉せられしと聞けり

◎子爵の胎教 令嗣直繩君の令夫人は當時妊娠中なりしが子爵の病氣重態に赴きてより衣帶も解かず看護せられ子爵も喜びて其孝養を受けられし不淨を取扱ふ際には直繩夫人に限りて其座を避けしめらるゝを例せり是れ令夫人が妊娠中なるより此等不淨の事を觀せしむるは胎教を重する所以にあらずとせられたるなり又公が令孫直繩君を鍾愛せらるゝは非常にて如何なる貴重品を玩具として損傷せらるゝことあるも公は笑ひ問はざるを常とし直繩君が病床に來たるゝは公が殊に喜ばれし所なるも決して久しく居らるゝを欲せず侍女をして伴ひ去らしむるは亦幼齡の方に病苦の状態を見せしむるは其精神上に及ばず影響の不良なるを慮られしなりと

◎子爵の庭訓 公が令嗣直繩君に對する庭訓は頗る嚴格にして苟も其の身華族の榮爵を帯ぶる者は上は皇室の藩屏と爲り下は國民の模範たらざる可らずと云ひ且つ舊封士民との情誼を持続すべきを繰返へし遺言せられたりと公は尙ほ數年間存命し直繩君を訓養せんと期せられ「直繩が西洋より歸來せし頭腦を更に日本的に陶冶したきものなり」と云ひ居られたり

○子爵の目乗 子爵は細大の事皆な目乗に收録せられ其遺言の如きも目乗に思ふがまゝを記載しありて何人に讀ましむるも可なりと言ひ居られし由蓋し君子は人に耻づべきの言行無ければ何人に示すも何等疾しき所無き公の平生を見るべきにあらざるや

○子爵の靈牌 公の靈牌は書齋に安置せられ公の遺言に基き一年間は其儘にして他に遷されざる等なりと聞く公が其生存中に於て語られたるは余が死せば一年間は書齋に靈牌を安置し知人の來りて香を焼く者あらば必ず拒むこと勿れ是れ余を思ひ及ぶる人なれば余は喜んで之を享くべく余は靈魂不滅説を取る者なればなりと然れば中陰も過ぎなば何人にも靈牌の焼香を許さるゝ云へり

附言、公は麒麟の名臣たれば公の記傳は正史に傳ふるあらんも余が二三の見聞を記載するは公の知遇に感激して然るのみ

●横尾少佐へ祭料 故陸軍歩兵少佐横尾平氏祭料として鍋島侯爵家より金五十圓を又陸軍大學校高等官一同より香典として金百圓を執れも故少佐殿父卯八氏宛寄贈し來りたり

●田島神社へ寄附 國幣中社田島神社へ鍋島侯爵より備前國住人吉次銘入名刀一振御獻納せられたり又同社へ大隈伯より金百圓寄附せられたり

●閑院大將宮殿下御來佐 (玉顏麗はしく内庫所に入らせ給ふ) 陸軍大將大勳位功二級閑院宮載仁親王殿下には第二特命檢閱使の御重任を帯び給ひ五月二十九日夕刻米御發午前十三時三十七分の下り特別列車にて屬員陸軍少將福田雅太郎、砲兵大佐石丸真臣、同歩兵大佐長坂研介、同騎兵大佐中島操外七將校並に當地より御出迎の石橋本縣知事、二木警察部長を隨へさせられ佐賀驛に着かせ給ひ徳佐賀驛長は直に車庫を排し御案内申上げ殿下は玉顏麗はしくブラントホームに下りさせ給ふ是より先きブラントホームには豫れて來佐ありし鍋島侯爵家名代直繩君、堀内大

村旅團長、岸本内務部長、西野地方裁判所長、稻澤檢事正、長谷川、青木の兩少將、長堀佐賀縣團長、各郡長、野口市長、嘉村市助役、大黒、白井の好生館正副館長、古賀伊丹の兩銀行頭取、縣會議員、在郷陸海軍の將校、各村長、市參事會員、愛國婦人會員、新聞記者等貳百餘名御出迎申上げ殿下には陸軍大將の軍服にて各種の勳章を胸間に輝かせ玉ひ蕭々玉歩を進ませられ出迎人一同へ一々手御會釋あらせられ石橋知事の御先導にてブラントホームを出でさせ給ひ驛内三等室西側に整列奉迎せし日本赤十字社特別社員へ御會釋あらせられ給ふ斯くて豫て驛前に牽き參らせし軍馬に御跨らせ給ひ御供の人を隨へさせられ玉容勇ましく内庫所へ向せられたり

御沿道の奉迎 御沿道なる唐人町入口には堀之内大尉の指揮する一中隊の儀仗兵、神宮司中尉指揮の一小隊の儀仗兵及千代松少佐指揮の第三大隊は青柳旅團を右翼として堵列し殿下御通過に際し將官に對する『海行かば』の喇叭を吹奏し在郷軍人分會及學校生徒は道路の兩側に整列し一般人民は其後方に堵列して何れも御奉迎申上げたるが殿下の英武と徳風とを欽仰し萬聲の熱誠を捧げ御奉迎の誠意を表したることゝ殿下には一々御答禮あらせられつ唐人町より縣廳通りに出でさせられ物産陳列館前より御左折御指定の内庫所へ入らせ給ふ

殿下の御動靜 斯くて御着遊ばせられたる殿下は表支關に於て前記直繩君並に鍋島家々扶其他の出迎を受けさせられ一日御居間に入らせられたる後大廣間に御出座第五十五聯隊長長堀均大佐以下上長官一同の伺候式に次で石橋知事、西野裁判所長、稻澤檢事正の事務成績申告式あり終つて高等文官並に有位有勳者に拜謁を賜ひ御書食の後午後二時御出門徳永署長、騎馬憲兵の先驅にて御附武官、直繩君、石橋知事、岸本内務部長、二木警察部長、西野裁判所長、稻澤檢事正、堀内申上げ御順路を北堀端に市役所前より御左折佐賀中學校に向はせられたるが門前兩側に於て生徒一同及玄

關口にて閑院學務課長千住同校長其他各學校長の出迎を受けさせられ御休憩室に充られたる校長に御休憩の後千住校長の案内にて講堂に陳列せる各中學校(男子部)の成績品(一學級より一學級)を台覽遊ばされ同二時半御出門師範學校に向はせ給ひ沿道に同男女生一同の出迎を受けさせられ此處にても講堂に陳列せる縣下各高等女學校、實科女學校、各尋高小學校生徒の成績品を御巡覽ありて三時御出門途中物産陳列場に御立寄遊ばされしが日頃産業獎勵には特に御心を注がせ給ふ事と詳細に御巡覽の上何れに就て御下問あり同三時半御機嫌麗はしく御歸還遊ばされたり

御來榮市中 宮殿下の御來榮に就ては各官衙を始め市内各戸共國旗を掲揚して敬意を表したり而て殿下今回御來榮は初度の御事とて豫て殿下の威風を欽仰する縣民は其英姿を拜し參らせんとて遠近の老幼男女堵の如く集り殊に御沿道筋にては七重八重の人牆を築き何れも御馬前に拜伏して御奉迎申上げたるが佐賀警察署にては殿下の御順路は勿論萬一を警戒する爲め市内各派出所詰巡査、伊萬里、小城兩署より刑事を召集し警戒頗る嚴重を極め遺漏なかりき

儀仗衛兵 當聯隊にては神宮司中尉指揮の下に儀仗衛兵一個小隊を内庫所に派遣し宮殿下御滞在申警護の任に當らしむることゝなれり

殿下へ献上品 石橋本縣知事其他より物品獻納を爲し御聽許あらせられたる分左の如し

- 一、泥猴魚 三百尾
 - 一、花瓶 三個
 - 一、文鎮 三個
 - 一、綬通 二枚
 - 一、素麵 一箱
 - 一、平麵 一箱
 - 一、丸房露 一箱
- 佐賀市岸川町 肥前縣類同業組合 秀島春一郎 堤 善吉 佐賀市八丁馬場

- 一、清酒 一樽
 - 一、蜂蜜 二瓶
 - 一、羊羹 一箱
 - 一、干饅頭 一箱
 - 一、素麵 一箱
 - 一、紙 三種
 - 一、干饅頭 一箱
 - 一、清酒 一打
 - 一、磁製置物 一個
- 佐賀郡久保田村 古賀文一郎 三養基郡菟村 日吉 林助 小城市小城市 森永 惣吉 小城市小城市 小副川泰三郎 小城市小城市 山口 伊三 右 同 肥前製紙會社 小城郡岩松村 七田 秀一 東松浦郡呼子村 山下 善人 西松浦郡有田町 香蘭合名會社 丸真臣、歩兵大佐長坂研介、二等軍醫正井上圓治、砲兵中佐西郷勝藏、輜重兵少佐服部英男、歩兵大尉廣瀨園治諸氏の外屬官二名は新馬場松本屋、工兵中佐西尾糾夫、二等獸醫正太田植太郎、二等主計正原三郎諸氏は同千歲館へ投宿されたり
- 直繩君御來佐 (侯爵御名代として) 侯爵御令嗣直映君は御父君御代理にて宮殿下御接待役として御下縣の御豫定なりしが御病氣の爲に御中止相成りたれば舊鹿島藩主鍋島直彬御令嗣直繩君侯爵家御名代を承り五月廿八日午後四時五十九分當驛着列車にて御來榮市中内松原町松陰館に御投宿あらせらる
- 大將宮殿下御出發 第二特命檢閱の重任を帯びて御來榮中なりし閑院宮大將殿下には當聯隊及關係官衙御巡閱終了し六月二日午前八時四十八分下り列車にて長崎縣佐世保市に向ひ御出發相成りたり先之御旅館内庫所前より堀端縣廳通り角まで儀仗兵及堵列隊を以て充たされ北八幡社横側迄は小學男女生整列唐人町より驛前までは各中等男女學生各職員引率の下に堵列驛内外には五十五聯隊將校軍人會員を初めとして各官公衙の重なる人々及愛國

婦人會員等各盛裝を凝して御奉送せりやがて定時となるや徳永佐賀警察署長の御先導に騎馬の二憲兵駢ひて先驅を承り殿下には愛馬に跨り玉顔麗しく中島御附武官福田少將其他の屬員を隨へさせられ御出門沿道の奉送者に一々舉手會釋を給て着驛あらせられ驛長室に休憩徳永署長の御案内にてブラットホームに出堵列せる各奉送人に舉手の禮を施しつゝ御乗車鍋島侯御名代直繩君及家扶中野致明翁を特に引見御挨拶ありて御出發ありたるが石橋知事二木警察部長は早岐まで野口佐賀市長は武雄驛まで見送の爲御隨行申上げた

●御買上品 閑院宮殿下には實業御獎勵の思召にて物産陳列館に陳列せる物品中より左記の通り御買上の光榮を賜はりたり
一、獅子置物(唐津産)壹個 東松浦郡唐津町 中野寛林作
一、コービー具(十二個)一揃 西松浦郡有田町 香蘭合名會社製

●鍋島侯の明月吟 (松浦伯郎の雅宴東京向柳原松浦伯爵邸内蓬來園に於て中秋明月會を催す詩人として芳川伯、杉浦重剛、小牧昌業、目下寛、寺尾博士、歌人として鍋島侯、柳原伯、津輕伯、峰須賀侯、大口綱二、池邊義象、坂正臣の諸氏を筆頭に集る者五十餘名、歌に『月夜懷舊』詩に『月下懷人』を誦す、池に臨める詠歸亭の床間には岸駒の『月と波』の軸を掛け茶室には片桐岩見守の月を詠じたる色紙を掲げ金綺亭には定家卿の秋草を詠じたる軸と同じく明月記の巻物を飾り書齋には文晁の赤壁の圖の軸物その他何れも數奇なるを飾り池上には蘇子赤壁に客と共に月を賞するに因みて一隻の屋根船を泛べ周圍には雅びなる鼓阜提灯を點じ東儀民四郎氏筆を豐時義氏横笛を同喜秋氏笙を吹く秋切々薄り来るを覺ゆる時、詩を作り、歌を作り寛友諸伯管を執つて月見の宴を描けば各々競うて筆を走らせ合作忽ち成る主人の伯は『長傳斯道繁歌聖、名士追隨登水樓、明月記在明月照、古今一樣賞中

秋』と詠じ鍋島侯は古にかはらぬ月の影見つゝ、
すぎにし君をしのぶ夜半かな
を得たり夕に及んで池邊の食堂に入り月に對して杯を擧げ散じたるは九時頃なりきと

●第八回佐賀縣學生大會記事

諒園再び來りて昨夏此學なく諒園明けて茲に第八回を緣故床しき鹿島に擧げむとするに當り圖らずも舊藩主子爵鍋島直彬公の薨去に遭ふ吾人の悲痛大なると共に又双手を失ひたるの感ありきされど子爵の御遺志により五十日祭を終らせられたる八月八日を以て故子爵追悼の意を兼ね其舊領地鹿島に於て開くに決す當日の會場は鹿城の名残を留むる鹿島中學校綠蔭濃かにして紫洋を瞰下し氤氳縹緲肥筑の峰巒を望む前々日以來の天候陰曇は甚幹部の意氣を損ぜしが幸に此の日朝暉光柔かにして炎威強からず又天公雨を降さむとするにもあらざりき鹿島子爵家を始め有志諸賢の同情と援助とは十數日以來幹事委員一同の奔走と相俟らて準備は遺憾なく整ひ式場餘興場競技場來賓室等も夫々設けられ校門には大國旗を交互し式場正面の演壇には故子爵鍋島直彬公の寫眞を安置し前に松に黄金色の草花をあしらひたる生花を備へ左右兩側に來賓席に充て場内の四周に掲げたる幾多佐賀の先輩其他の扁額及寫眞は何となく場内を壓し敬虔の念を起さしめたり會員は午前八時頃より續々會場に押し寄せ定刻九時半煙火三發を合圖に一同式場に入るや接待係の案内により子爵鍋島直繩様を始め堀内廿三族團長、井原代議士、岸本内務部長、原田藤津郡長、岡理事官、副島大佐、竹下聯隊區司令官、伊東祐毅、糸山貞規、森山師範校長、千住佐中校長、高田下村の諸學士及各新聞記者等百餘名の來賓着席す時に九時五十分東京帝大文科大學學生若永隣一氏開會の辭を述べ來賓諸賢及學生諸君多數の出席を謝し降壇同

法科大學生今泉佐八氏司會者席に着く、に於て直に學生演説に移り早稻田大學生橋本貞市君は「誤られたる國土」と題し江藤南白翁に就て慷慨悲憤の語氣を以て

諸君諸君が苦むす佐賀城附近を逍遙せらるゝ時彼の城壁の彈痕はそも諸君の胸に何を印するものぞ又諸君が招魂社前に佇まれば時彼の石碑は諸君の耳に何を囁くものぞ郷黨の偉人を慕ふは是皆人の天性なり彼の長州人が吉田松陰先生を慕ふが如く將薩摩軍人が西郷南州先生を慕ふが如く予は我佐賀幾多の偉人先哲を慕ふ而して特に南白江藤新平先生を慕ふや切なり予は先生に對する世人の誤解を聞く毎に予が先生を憶ふ情は更に一層其深きを増すものなり彼死して既に四拾有餘年而も世人の先生に對する毀譽褒貶は尙未だ定まらず

と前提を掲げ更に論歩一轉

嘗て浮田博士の近世政治史の講義を聞けり博士は英國革命を論じガリバークロムウェルを評して曰く「彼死して已に二百數十年然るにギゾーは彼を目して惡漢と呼びヒュームは彼を評して奸雄となす反之カールは彼を崇拜して英雄と云へり毀譽褒貶の定まらざる是人物の爾く大なるを示すものなり」と博士の此言移して以て我南白先生を最よく批評せるに非ざるかを思ふと論じ

諸君も知る如く先生の平生は眞に偉勳赫灼たるものなりき總督府の帷幄に參じ幕府討滅を容易ならしめたるも東北の鎮定を速ならしむる爲選都を力説せしも彼南白先生なりき年併特に彼の功績の偉大なるは司法權の確立と民選議院設立の建白とは非ざるか

と先生の偉勳を論じ更に細に入り

明治五年司法卿となるや恰も快刀亂麻を斷つ夫の如く一大英斷を以て司法省の改革を斷行し歐米の新思潮を輸入して改定律令の制定となり又學者を聘して顧問となし數多の法典の起草に着手

せり而して卓見なる南白先生は民權擁護の爲には必ずや司法權の獨立を要となし遂に裁判所の新設となれり司法卿南白先生の獨介不羈の意氣は明に法の權威を天下に示し一切の情實を排して法の前には何等の權威も認めざりき富貴も淫する能はず威武も屈する能はざる大丈夫なりき諸君彼の尾去澤事件に於て大藏卿井上馨をして屈服せしめたるも又彼の山城屋事件に於て時の陸軍卿山縣有朋をして後に睦若ならしめたるも實に南白先生には非りしか

と先生の功績先生の氣概を論じ

吾人は思はざるべからず先年江藤氏表彰の議賛成者多きに拘らず内閣にて擢進になりし原因はそも何處にあるか之に異議を挾む元老はそも誰ぞ又世人は我國々會開設の功を伊藤公にのみ歸するが如し予は諸君と共に伊藤公の功を認めて疑はず併し之にのみ歸するは果して正當なりや朝に雄禽の時を報するや雌鶏の教を受く南白先生の民選議院の建白は總て是我が國々會開設の曙光の第一歩に非ずして何ぞや即彼の功績の主なるは民選擁護の保證たる司法權の獨立と國會開設の建白にありき

諸君も知る如く近世政治上の一大特徴は立憲政體なり立憲政體の本義はモンテスキューの所謂三權分立にあり此の意味に於て彼れ南白先生は我國立憲政體の先驅なりと云ふべし我國立憲政體の存する限り否我帝國の存する限民權擁護の恩人として彼の功績は永久に讃美すべきものに非るか

と彼の偉勳を叙し

然るに社會は盲目なり予は先生に對する世人の批評を聞くに忍びず果して南白先生は奸雄なりしか徹頭徹尾憂國の快男兒南白江藤新平其の人の本意は征韓憂國の兩黨を率ひて征韓の輿論を喚起し政府の猛省を促すにありき然るに風聲鶴唳にも驚く時の縣令岩村高俊は針小棒大に政府に報告し熊本鎮臺六百の兵は遂に動きしなり諸君風船玉を壓すれば必ずや破裂せざるを得ず露

西亞のアナキストは壓迫すればする程其の勢を増すに非ざるや此の政府の高壓手段に對し佐賀葉隠の快男兒胸中に燃ゆる炎々たる焰が何れにか其出口を見出すは是理の當然にあらずや此如して佐賀兵亂は勃發せしなり

予は是に先生の意を明にする爲先生自ら筆を取られし檄文の大意を述べむ「朝鮮我が國書を退け我が國使を辱む其の暴慢無禮實に言ふに忍びず上は聖上の爲下は億兆のため敢て萬死を顧みず誓て此の大恥を雪がむとするは是人民の義務にして國家の大事而して人々自ら奮起する所以なり然るに政府は我に兵を以てす勢遂に此處に至る」先生の本意實に斯の如し英國革命の大慘劇を以てクロムウオルの罪となすは餘りに慘酷にあらずや

佐賀兵亂勃發の直接原因は熊本鎮臺の移動による戦争煽動の責任は江藤先生其の人よりも寧ろ政府當局者に非るか如斯彼の本意ならざりし佐賀兵亂は彼の政敵大久保伊藤の私怨を晴らす好機會となれり嘗ては部下たりし河野敏鎌によりて罪名を負ひ刑場の露と消えし憂國慷慨家の胸中は何なりしか思うて此處に到れば予は此の誤られたる國士の爲に萬斛の涙を注ぐと共に併せて社會の盲目を呪はざるを得ざるなり

と熱辭を以て論じ去り論じ來り予は是に繰返すべし諸君佐賀城壁の彈痕は吾人の胸に何を印し招魂社畔の石碑は吾人の耳に何を囁くかと語氣を強うして吾人後輩は彼の殘せる憲政の爲努力し而して彼の功業と彼の赤誠とを天下に喧傳せざるべからず

と鞭達して論を結び斯く論じて誤られたる國士の爲辯じたる次第なりさて滿場拍手を浴びて降壇次で東京帝大法科大學生江口順一君は「日支交渉を論じて大和民族の發展を想ふ」と題し

其要領に曰く土地には限りあり人口は駭々として増加す、生存競争は益盛にならざるを得ず帝國主義の潮流は世界に漲れり。現下の歐洲大戰亂はその極點に達せるものならずや。我日本が日本民族の發展と東洋の平和とのためこの世界の大勢に乘じ盡きせしもの之日支交渉なり。而して我國の獲得せる利權少しとせず。然りし雖之唯紙片のみ權利たるのみ。我國人は更に之を實現せざるべからず。故に努力奮闘せざるべからず。起たすや 諸君 起ちて日本民族を彌榮に發展せしめんかな。一

幹事東京帝大工科大学中村經夫氏、は鍋島侯爵鍋島直虎子其他(別項)の祝電を披露し終て鍋島直繩子祝辭を朗讀せられ理事官岡政雄氏は石橋知事の祝辭を代讀し次で幹事東京帝大農科大學生橋村博氏副島伯爵の祝辭を代讀して司會者席に着く

鍋島子爵祝辭本日我が鹿島ニ於て第八回佐賀縣學生大會ヲ開クニ當リ茲ニ一堂ニ相會シ談笑ノ間互ニ交情ヲ溫ムルヲ得ルハ直繩ノ大ニ欣幸トスル所ナリ

諸君ニ本會ノ組織セラル、ヤ先考直彬亦タ大ニ其ノ學ヲ贊シ爾來諸君ニ對シ期待スル所深且大ナリシハ諸君ノ胸臆ニ存スル所ナルベシ然レ今即チ亡シ不肖直繩敢テ爵ヲ襲キ淺學寡聞且世故ニ熟セズ固ヨリ諸君ヲ裨益スル所ノモノアルナキヲ懸ゾルバ雖モ幸ニ諸君ノ直繩ヲ見ル猶ホ先人ニ於ケルガ如キモノアラバ當ニ直繩ノ幸慶ノミナラズ先人モ亦タ應サニ地下ニ感喜スベシ

今ヤ内外多事ノ秋ニ當リ益我縣固有ノ元氣ヲ振作シ進ンテ國光ノ宣揚ニ努ムルノ緊要ナルヲ感ズルヤ切ナリ直繩諸君ト共ニ愈々砥礪以テ忠貞ノ節ヲ效シ先人ノ遺志ヲ成サンコトヲ庶幾フ聊カ所感ヲ陳ジ以テ祝辭ニ代フト云爾

大正四年八月八日

祝

從五位 鍋島 直繩

維時大正四年八月八日第八回佐賀縣學生大會ヲ鹿島中學校ニ開カル此三伏ノ炎威石ヲ爛ラシ金ヲ熔カスノ日ヲ顧ミシテ此盛筵ヲ催サル諸君ノ意氣壯ナリト謂フヘシ抑鹿島ハ舊子爵直彬公ノ治下タリ公忠勤懇亮夙ニ心ヲ王室ニ存シ又深ク力ヲ佐賀縣下ノ教育事業ニ盡シ青年子弟ノ元氣ヲ鼓舞振作スルヲ以テ自ラ任シ其儀表タルモノ久シク其風實ニ頌情ナシテ志ヲ立テシムルモノアリ而シテ今ヤ則雄姿再ビ仰ギ難シ遺憾何ソ勝ン然ルニ今日此大會ヲ公ノ治下ニ開カル諸君ノ感慨亦果シテ如何ソヤ諸君冀クハ公ノ流風ヲ攀チ健剛弘毅勇往敢爲ノ氣象ヲ養成シ以テ他日國家ノ隆運ニ資スルアラシコトヲ是余カ深ク諸君ニ期スル所ナリ乃チ遙ニ胸臆ヲ寄セテ祝詞ニ代フト云爾

伯爵 副島 道 正再拜

祝

辭

茲ニ第八回佐賀縣學生大會ヲ開キ郷友相寄リ互ニ胸襟ヲ披瀝シテ知見ヲ交換シ志操ヲ鍊磨シ以テ各自ノ修養ニ資スル所アラハトスルハ深ク本官ノ欣フ處ナリ惟フニ方今我が國運振張ニ伴ヒ國事愈多端國家人材ヲ要スル益々急ナルアリ諸氏ヤ年少氣銳前途ノ多望ナルト共ニ其ノ國家ニ貢フ責任亦重大ナルモノアリ諸氏深ク思フ茲ニ致シ現時ノ學生漸ク奢侈柔弱ノ風潮アルニ鑑ミ宜シク學實剛健ノ氣風ト堅忍不拔ノ精神トヲ養ヒ益々研鑽ヲ加ヘ修養ヲ積ミ以テ一意専心各其ノ志スル所ニ向テ勇往邁進シ各自初志ヲ貫徹スルト共ニ國家有用ノ材タルヲ期セラレシ事切ニ望ム所ナリ茲ニ本會ノ開催ニ際シ聊カ所感ヲ述ヘテ祝辭トス

大正四年八月八日

祝

辭

佐賀縣知事 正五位勳四等 石橋 和

通信省通信局長田中次郎氏祝辭世界戰局ノ終了ニ當リ帝國ノ外交上經濟上如何ナル結果ヲ齎ス

雜 報

雜 報

然樂郷黨ノ間ニ旺盛ナル元氣ヲ鼓吹スルハ人生ノ一大快事
タリ何チ苦シムテ才能ナキ資力ナキモノカ都會中心ニ彷徨ス
ルヲ要セシヤ是予カ年来ノ切實ニ地方人士ニ説ク所ノ一タリ諸
子幸ニ予ノ一説ヲ聴カレンコトヲ望ム次ニ青年ハ元氣ト
身體ノ練習ヲ最モ心懸クヘキコト、シテ推獎セントス元
氣トハ濃烈ノ氣宇浩然ノ氣概正チ踏シテ躍レルノ勇氣忠勇ノ
精神仁俠ノ氣風此ノ如キモノヲ總稱セムトス此等ノ氣風ハ
青年學生ノ最モ五ニ砥礪砌礎スルニ妙味アルモノナリ又身體ノ
壯健ハ個人生存ノ要件タルト同時ニ一家ノ基礎トナリ一國
強兵ノ本トナリ各般ノ生産活動中樞ナリ天行健ニシテ自強不
息ト云フコト天ノ運行ノ常住健在ニシテ晝夜風雨宜チ得幾萬年
自強ニシテ終始スルナキチ云フヘシ國民生活ノ根源亦實ニ身體
ノ壯健ニ在リ一國ノ興廢實ニ此點ニ係ル日常ノ座臥進退常ニ腹
力膽力ノ鍛練ヲ經テ心膽ヲ練リ以テ體育ノ本分ヲ忘ルナカラ
ンコトヲ切望ス此ノ如ク身體ノ強健ヲ圖リ研鑽ノ眞面目ヲ充
分ニ發揮シ得テ始メテ帝國ノ隆興ヲ期シ得ヘシ而シテ同郷青
年ノ士力率先廣ク能ク以上ノ精神ヲ貫徹シテ範チ東西ニ示シテ
帝國青年ノ中心タランコトハ實ニ予一人ノミノ翹望ナランヤ

祝 電

本日の大會を祝す
侯爵 鍋島 直 大
大會を祝す
子爵 鍋島 直 大
大會を祝し發展を望む 肥前協會々長伯爵 大隈 重 信
大會を祝す 伯爵 大 木 達 吉
第八回大會を祝す 宮内大臣男爵 波多野 敬 直
本會の盛會を祝す 逓信大臣 武 富 時 敏
第八回大會を祝し併せて本會の趣旨を益發揮
せられんことを冀ふ 前北海道長官 中村 純 九 郎
本日の大會を祝し尙將來の發展を祈る

岡山縣兒島商船學校長海軍大佐 下村 亮 太郎
御盛會を祝す 佐賀市長 野 口 龍 毅
盛會を祝し將來の發達を祈る 早稻田大學講師 文學士 中野 禮 四 郎
盛會を祝す 東京 醫學士 白 川 彌 源 太
達ニ貴會の隆盛を祈る 六甲山上方法學士 田 中 鐵 三 郎
盛會を祝す 東京高田商會 工學士 松 瀬 勇 雄
盛會を祝す 高知縣理事官 法學士 中 野 邦 一
同 逓信省 法學士 深 川 繁 治
同 伊豫 法學士 生 野 章 作
同 佐賀 醫學士 千 住 作 市
同 東筑中學校 文學士 水 町 義 夫
同 豐橋 法學士 山 浦 護
同 東京 文學士 松 信 定 雄
同 東京 法學士 伊 東 祐 輝
同 東京 法學士 南 正 樹
同 三重縣廳 法學士 多 久 安 信
同 佐賀 法學士 板 谷 薰 憲
同 大隅 高山 野村 鹿中教頭
同 東京 第七回學生大會幹事 向 大 次 郎
同 相知 在東京學生大會幹事 眞 崎 寛 三 郎
同 東京 東京帝國大學佐賀學友會 佐賀郷友青年會

茲に於て司會者は歩兵第廿三旅團長堀内少將を紹介す少將は「歐
洲大戰ニ學生大會」と題し歐洲大戰より説き起し澎湃として帝國
を襲ふ怒濤は一に之れ不言實行の精神に依り消滅すべしと論じ、
次に眞に本會幹事として盡瘁せられ或は夕陽生を以て文壇に名を

馳せたる佐賀中學校教諭文學士下村虎六郎氏は悠然として演壇に
現はれ「教師より學生へ」と題し別項所載の如き演説をなせり
記者は久闊に氏の熱烈の語調に接し其普榮城會の演壇上學生を鞭
撻せられし當時を追想せり次で俊才の開え高き京都帝大講師文學
士高田保馬氏は司會者に應じて登壇人物産地としての佐賀」と
題し別項所載の如き快辯を揮はる次に肥前協會を代表し特に東京
より歸郷せられたる辯護士絲山貞規氏は「勇敢」の題下に肥前協會
長大隈伯爵の言傳ありて數十分に亘る演説をなし岸本内務部長
は「中等學生に望む」と題し

諸君諸君が廿餘年の生涯は我帝國の隆運比なき時代なりき其の
進歩や實に旭日天に沖する勢なり願ひれば嘉永六年米國の水師
提督ペルリが數隻の艦隊を率ゐて浦賀の波を蹴つて眠れる帝國
に一大覺醒を與へし以來幕府の威信は全く地に墜す茲に幾多高
價なる志士の熱血を以て七百年の封建政治を一朝に紛碎せり
翌頭に述べ五十年間に前ける帝國國運の向上を論じ
然らば總ての問題は此驚嘆すべき發展の前に樂觀を許すべきか
斷定は的確なる實證の上に立たざるべからず吾人は安價なる斷
定を避けむが爲に最冷靜に國情を研究せざるべからず
武道的精神の力開闢以來の忠君愛國の熱情を經し緯し樂
き上げたる列國の及ばざる處なるも驕て考ふるに一面の要素に
は大なる缺陷あり

と反省を促し
諸君が帝國の經濟狀態を知悉理解する時に於て心平なるを得る
か日本國民には武士的精神充實せり併し遺憾ながら封建の餘弊
商工等を蔑視する固陋なる風習残れるを見逃すを得ず爲に産業
振はす
さて對外貿易の歴史に就て論じ五十年間に長足の進歩をなせるも
大正年度の十二億を以て一度眼を海外に馳する時は百億を超過す

雜 報

る英國乃至七十億餘の獨米と比肩する最爾九州に等しき耳義に
思を馳する時論者果して惶惶たらざるを得るか
文明の吸收に汲々たりしと歐洲戰勃發以來全く寄る邊なき捨小
舟と化し去つた豊葦原の瑞穂國の昔より農を以て國の大本と定
められし我帝國も内地産の五千萬六千萬の米に依て七千萬生靈
は到底養ふを得ず食料も外國に仰がざるべからず知識も藥も日
用品も外國に仰がざるべからず産業と没交渉の強國強兵論は空
想に過ぎぬ斯く論ずれば帝國の文明は偏したる文明なり是をな
して一等國と安んずるを得ば一等國も亦惘然たらずや
と論じ更に
精神上の問題は如何國家を蠶毒するパチルスは精神界に蔓延せ
り日本國民の思想界は二千年來育成せられたる國華なり併しな
がら維新以來外物の輸入と共に危險思想侵入してありと信ず我
等國民の固有思想を破壊する思想は凡そ三回あり即佛教の傳來
耶穌の傳來及歐米の新思潮なり
我國の思想界は牢乎として動かすべからざる思想あるも動もす
れば此思想に一大破壞来るやも知れず
近時中等學生の精神動もすれば不健全なる狀態に傾く等は身體
と精神狀態にあり國民第一の基礎は中等學校に入れる諸君にあ
り故に諸君は自ら國家に重きなす覺悟をなさざるべからず國
家の隆昌發展は此處にあり
と結んで中等學生を反省せしめて降壇
原田藤津郡長は「所感」と題し陸軍歩兵大佐副島辰氏は「スバル
タの武士と業隱主義」と題せしも諸君の苦痛を察して中止せむと
て唯學生の健康を祈りて降壇次で肥前協會幹事伊東祐毅氏は「學
生諸君に告ぐ」と題し極めて簡単に
東京に於ける本縣人の諸集會に就て明治廿九年に始まり目下大隈
伯を會長に戴ける肥前協會に就て故佐野常民伯を會長に推戴せし知
伯新會其他軍友會又明治十二年十二月に起れる佐賀郷友青年會に關

し又本學生大會が同會の事業なる事及び目下久米博士の講演を催せる談話會も亦今後の事業なる事を述べ終に佐賀圖書館の分館設立に就て盡力を乞ふ旨を宣せられて降壇井原代議士の「直彬公」竹下佐賀縣區司令官の「學生の體格」は時間の都合上中止せられたるは甚遺憾なりき

茲に於て幹事東京帝大醫科大學生岡本紘氏は閉會を宣し午後の大會次第に就て注意を與へらるゝ所あり時に午後一時過ぐる數分來賓には朝の休憩室を食堂に充てゝ質素なる折詰を饗し會員は食券引換に菓子辨當及子爵家より一同に寄贈せられたる網堂（直彬公）遺稿抄録一部宛を配附せられ各自運動場に四散す午後二時頃同支關前に集り幹事引率の下に打揃うて古枝村普明寺なる故子爵の墓所に參拜し且大會の状況を報告する所あり直繩子には支關に出迎へられ來賓學生を招ぜらる茲に於て僧侶の讀經諸員の焼香あり終て暫時休憩の後再び會場に集合し午後三時半より道場に於ては擊劍柔道庭球試合を開始し別項所載の如く壯觀を極めしが庭球は大雨の爲不幸中止せしを以て直に餘興に移る歸郷を機とし奮て來會せる大日本士道會の大塚士道氏の幼年劍舞及佐賀に於て名聲噴々たる横山氏の薩摩琵琶等何れも壯絶快絶を極めたり終て午後八時より中正閣に於て晚餐會あり幹事法科大學生今泉佐八氏の簡單なる挨拶ありて酒數行驟雨霽れて涼氣堂に滿つる處歡談快語時を移し或は琵琶劍舞の餘興に歡を盡し九時を過ぐる頃和氣露々裡に散會を告げ此日の盛會を終れり尙本日の優勝に意氣軒昂なる佐賀中學の生徒數十名は寄宿舎に於て夜會散會後慰勞の爲訪問せる下村文學士外同中學出身先輩と共に深更まで快談に時を移し活氣横溢せり

○競技勝負

午後三時半競技開始し各校選手の龍蟠虎搏壯觀を極めしが其結果擊劍柔道共に佐中の勝なり庭球は佐中及佐師の優勝戦をなさむとする時不幸雨を流す雨の爲中止せり

劍道部（糸山貞規氏審判）

（第一戰）

唐中 佐中
野崎 尾田
德永 松林
長村 青柳
佐中崎村を殘して勝つ

（第二戰）

小中 龍中
圓城寺 百田
中川 永池
石隈 山口

（第三戰）

師範 鹿中
光武 武富中
池田 勝山
正寶 青木

（第一戰）

尾松 青崎 佐中
田林 柳村 中
山吉 永池 田中
山口 末田

（第二戰）

鹿中 佐師（勝）
中松 野尾
高柳 野尾
松永 本石
向大 館場

抽籤の結果鹿中對龍中なる

（第一戰）

鹿中 龍中
武富 百田
山中 永池
青木 末田

（第二戰）

鹿中 佐師（勝）
中松 野尾
高柳 野尾
松永 本石
向大 館場

茲に於て愈々優勝戦の各一勝佐中對龍中の爭覇戦となりしも龍中は曩に佐中の軍門に伏したれば佐中は當然の權利者として優勝の大旗を得たり

尙三本勝負は左の如し

×〇〇（有工）川浪 〇〇（有工）新ヶ江山 〇〇（有工）園田
〇〇（小中）圓城寺 〇〇（有工）新ヶ江山 〇〇（有工）園田

第一回（鹿中對佐師） 第二回（小中對佐中）

鹿中 佐師
一ノ瀬 江頭
井原 横江
中島 藤原
△篠崎 大藤
山川 尾田
木城 寺小
下島 尾田
下大 古神
村坪 賀代

第三回（龍中對小中）

出席校數五にして第三回戦に師範に敗れたる鹿中佐中に伏したる小中二校抽籤の結果小城中對龍谷中の勝負となり

龍中 小中
五島 寺小
山崎 城島
北岡 小森
北川 下木
下神 大賀
村代 坪賀
木小 城島
下森 島中

二本勝負 鹿中 井原 〇〇小中 田中

優勝決戦 小中は佐中に敗られ榮城城下佐師佐中二校に決することとなり

第一戰 佐中（勝） 唐中（負）

野崎 尾田
德永 松林
長村 青柳
佐中崎村を殘して勝つ

第二戰 鹿中（負） 佐師（勝）

中松 野尾
高柳 野尾
松永 本石
向大 館場

擊劍柔道に優勝を占め庭球亦勝利を博せる佐中は意氣揚々として天を衝くの概ありき佐師亦共に本日の優者たり

初秋の風颯々榮城々頭優勝旗飄り赤松の梢鯨波の響を傳ふ「江東子弟多勇傑捲土重來不可知」勝て益兎の緒を占め他日の不覺なきを期せよ（ハ生記）

左記諸君は炎暑にも拘らず委員として奔走せらる紙上更めて好意を謝す

鐘ヶ江満次君 岩永 末作君 正司 亮次君 松隈 國健君
久原 研吾君 岩野 正男君 江口 順一君 野口 久吉君
北村亮四郎君 野口 靜一君 松村 光磨君 岡 潤吉君
橋村 謙二君 木塚 新君 熊谷 勲作君 本庄 圭一君
深川 清君 杉光 松次君 山下 義男君 大屋 政六君

來賓出席者（次第不順）

子爵 鍋島 直繩様
二十三旅團長 堀内文次郎殿
理事官 岡 正雄殿
步兵大佐 副島 以辰殿

井原喜代太郎殿
岸本内務部長殿
藤津郡長 原田 守造殿
森山長之助殿
伊東 祐毅殿
聯隊區司令官 竹下 宣行殿

高田 保馬殿
下村虎六郎殿
嘉村彦四郎殿
納富 教雄殿
梅崎 玄三殿
家永 盛種殿
古賀 紫仙殿
北御門正夫殿
大塚俊四郎殿
箱田新太郎殿
副島 武熊殿
鹿中職員七名
川崎福太郎殿
一ノ瀬平太殿
松尾 亮平殿
岩永 新七殿
中西卯太郎殿
山崎 常雄殿
中島 政一殿

外數十名

學生出席者

東京(醫)鐘 ハナ 大 ハナ 學	同(法)小柳	又一	同(法)岩永	末作
同(法)草場	同(醫)日影	安平	同(法)正司	亮次
同(法)久原	同(法)江口	順一	同(農)野口	久吉
同(農)北村亮四郎	同(法)北島謙次郎		同(法)大串	啓二
同(醫)野口	同(法)松村	光磨	同(文)岡	啓吉
同(文)岩永	同(法)今泉	佐八	同(一)中村	經夫

同(醫)岡本 高等學校 五高 野田 七高 吉田 早稻田大學 橋本 深川 明治大學 大島 慶應義塾 山下 高等師範 廣島 杉本熊一郎 海軍機關學校 指山 辰雄 東北農科大學 西岡 勝次 高等商業學校 東京 榎 辰次 高等商船學校 東京 田中 利八 醫學專門學校 長崎 中島 義郎 大阪高醫副島辰太郎 慈惠 高木 蕭 同 田中 勇夫 明治專門學校 前田 嘉藏 京師武衛專門學校	同(農)橋村 博京都(法)水町 隆一 同 増田 圭字 同 橋村 謙二 本庄 圭一 川浪 源助 杉光 松次 同 松隈 尚雄 同 桑原立太郎 同 稻富 熊雄 同 犬塚 貞一 同 中原 賢一
--	--

110

永田 十郎
等中學生約四百五十名

第八回 佐賀縣學生大會寄附者氏名

金五拾圓	鹿島子爵	佐賀內庫所樣	金五圓	
金拾圓	鍋島直	繩樣	金五圓	
一網堂公遺稿抄錄八百部	小坡子爵	鍋島直	虎棧	金五圓
金拾圓	蓮池子爵	鍋島直	和棧	金五圓
金五圓	唐津子爵	小笠原長生	棧	金五圓
金參圓	武雄男爵	鍋島家樣		金五圓
金拾圓	縣知事	石橋和殿		金五圓
金拾圓	佐賀	西英太郎殿		金五圓
金拾圓	同	豐增龍次郎殿		金五圓
金拾圓	同	谷口清八殿		金五圓
金拾圓	同	池田陽一殿		金五圓
金拾圓	同	古賀善兵衛殿		金五圓
金拾圓	同	伊丹彌太郎殿		金五圓
金拾圓	同	深川喜次郎殿		金五圓
金拾圓	多良	新宮清朗殿		金四圓
金拾圓	武雄	副島虎之助殿		金四圓
金拾圓	東京	伊東祐穀殿		金四圓
金五圓	佐賀	中野致明殿		金參圓五拾錢
金五圓	同	田中虎三郎殿		金參圓
金五圓	同	古賀製次郎殿		金參圓
金五圓	同	永野靜雄殿		金參圓
金五圓	多賀久	大塚己一殿		金參圓
金五圓	佐賀	臼井鐵治殿		金參圓
金五圓	同	大黑安三郎殿		金參圓

雜
報

—

[illegible]

鹿島	同	同	同	同	同	同	古枝	能見	八本	多良	西野	五嬉	鹽田	唐津	同崎	濱島	有田	同萬里	伊代	曲川	西山			
矢野平八殿	久布白兼德殿	野中弘一殿	勝屋三規殿	小柳吉之助殿	永田佐次郎殿	愛野文次郎殿	吉田彦平殿	吉田利八殿	乘田忠太殿	朝日胤愼殿	西田七藏殿	森田廣太郎殿	井手又次郎殿	瀬頭平八殿	杉光次吉殿	宮島德太郎殿	常助殿	吉村耕太郎殿	蒲地駒作殿	久富季九郎殿	吉富半兵衛殿	兒島文之助殿	重富信雄殿	浪德助殿

[illegible]

西松浦	同佐賀	東山代	大山	同	伊萬里	有田	西唐津	同小野	同古館	同松尾元次郎殿	唐津	吉野	東嬉野	同江口太平殿	鹽田	久間	同諸川友三郎殿	能古見	同植松今朝太郎殿	同永田友一殿	同江副直樹殿	同池田令次郎殿	同富岡幸三殿	同山口虎四郎殿	多良	八木
浦村		藤谷	西山道助殿		中村千代松殿	岩野政太殿	高田英太郎殿	小野萬吉殿	正右衛門殿	菊池龍太郎殿	大渡熊次殿	富永繁次殿	江口太平殿	緒方久吉殿	津田良虎殿	森田友一殿	植松今朝太郎殿	永田友一殿	江副直樹殿	池田令次郎殿	富岡幸三殿	山口虎四郎殿	綾部幸三殿	光山城殿		

[illegible]

[illegible][illegible]

同	伊萬里	同	有田塚	鬼唐津子	呼唐	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	吉田	西嬉野			
柳夕瀨六次殿	藤田與兵衛殿	青木甚一郎殿	深川忠次殿	吉原愛道信殿	大庭忠孝德殿	河村嘉一郎殿	關根歡太郎殿	藤松巨六殿	森脇亮平殿	山上曹海殿	岡梅太郎殿	林田八百喜殿	山崎鐵一郎殿	辻長右衛門殿	岡副島勝吉殿	家永源次郎殿	岡石井三郎殿	田中智曉殿	藤井真平殿	永尾吉郎殿	野村忠靖殿	春日六郎殿

[illegible][illegible]

より園遊會開催せらる、來會者は伊國大使及び井ツヨリ公、大隈
首州夫妻、波多野宮相、松方侯夫人を始め伯子男爵其他朝野の貴
賢紳士淑女七百餘名來會、侯夫妻、令姉健子、令嗣直映氏始め丸
伴貞の迎接を受け庭園を逍遙し餘興は「杵屋六左衛門の長唄、九
一の太神樂、荒木寛幽一派の誦伯の唐書」あり、庭園には十餘軒
の各種模擬店を出し當日は明治二十五年天皇陛下（明治天皇）の行
幸あらせられし紀念日に相當し特に一層の喜びに満ち參集の來賓
和氣謌々たるものあり午後五時食堂を展き立食の饗應あり侯の挨拶
に次いで大隈、土方伯の謝辭、萬歳を三唱し薄暮散會す當日記
念とし侯夫妻令姉合作の絹地扇面に左の歌を記されしを來賓に配
贈せり

鍋島直大侯
あさかつきたまはるまてにおひにけり
三ツのみよにもつかへまつりて
松平健子
おひがみもうれしなみだをこぼしけり
うちこのひとにとしはいははれて
鍋島榮子夫人
世ごともいとしいははれてためしなき
いとしいははれてますがうれしき
尙當日來賓中の重なる人々の姓名左の如し
大隈首相、波多野宮相、武富遞相、河野農相、松方侯爵夫人、
細川護立侯、同夫人、前田侯爵夫人、同母堂朗子、伊達宗陳、

大隈首相、波多野宮相、武富遞相、河野農相、松方侯爵夫人、細川護立侯、同夫人、前田侯爵夫人、同母堂朗子、伊達宗陳、黑田長成、松平康莊各侯爵、土方久元、正親町實正、大木遠吉、華山資紀、吉井幸藏、小笠原長幹、副島道正、柳澤保惠、萬里小路通房各伯爵、花房、曾我、藤波、清浦、伊集院、三島等各子爵、遊澤、武井、高木、肝付、後藤、有地、小澤等各男爵、池田幸子、下田歌子、鳩山春子、入澤常子諸氏其他紳士淑女七百餘名

●御大典と共進會 今秋御舉行の御即位御大典には奉祝の誠意を表する爲め本縣に於ては共進會開催の議あり其内協議として石橋知事、岸本内務部長、福地商工課長、野口市長、中野商業會議所會頭、田上、伊丹、福田、太田の各評議員諸氏及木下書記長會合熟議する所ありしが縣當局にありては豫算の許す限り規模を擴大し普通の共進會と其選を異にし書畫、古器物に勿論教育衛生等の各展覽會をも開催し出來得べくんば水族館をも開催する意氣込にて會議は未だ確定せざるも多分物産陳列場を中心に銅鑼園内一帯及西部空地をも借用する豫定なるが開期は廿日間位にて御大典前後に亘り開催す可しと云ふ

●遺墨と遺愛 來る十一月御大典記念佐賀縣共進會開催に共進會品展覽會を開かるゝに當り之れが參考として鍋島侯爵家に始め大隈首相、副島、大木兩伯爵等に藏せらるゝ肥前縁故の珍物を乞ふて陳列せんとて會長の石橋本縣知事は特に會員千住佐賀學校長を東京に派遣せしに氏は先づ副島、大木兩家の出品を覽し八月廿八日歸佐したり尙ほ侯爵家及び首相邸の藏品等は後日陳達する筈なりと斯くて兩伯爵家の藏品は孰れも貴重せらるゝ所て其保管を縣廳會計課に托し會計課にては之を金庫に容れ置く筈なりと云へり左に其概觀を記せむ

▲恩賜の軍扇 明治元年六月中先帝陛下の故大木喬任伯に賜ふべきにして親骨を鐵とし子骨を竹にて作れるが共に黒漆にて塗り金泥を塗りたる絹地にて張り真紅の總を附けたり喬任伯は祇祿に賜ふの事由を記して包みたり確に同家の重寶たるべし

▲護身の一刀 紋綯の袋に容れたる一刃は故副島蒼海伯が護身

として愛撫せられたるものにて縁頭と小尻は赤銅祖金、目貫及び切羽、祖金は純金など其拵へに意匠を凝らし而して中身は何ぞと問へば是れ肥前第一の刀鍛冶として名高き初代忠吉と銘せられ鞘を拂へば光彩陸離夏尚ほ寒き心地せり

▲自筆學制案 八行單紙へ筆太に起稿せしは大本伯自筆の學制案の草案にして必ずや伯が文部大臣時代の執筆なるべく草案の内容を精讀するに由無かりしも筆力の遒勁にして活躍せるは伯の筆蹟たるを首肯しむ

▲日記と詩稿 副島伯自筆の日記二冊は天保十二年度に屬すれば伯が幼時のものたるや勿論なり、又天保、嘉永年度の詩稿數冊及び支那歷遊中の詩稿あり就中支那遊歷の詩は伯が得意の作多く殊に何如璋、錢子琴等の諸名家が批評を加へ雖黃を施したるものに係れば覆載間に一有りて二無き逸品たり顧ふに伯の詩賦は蒼海遺稿中に收めあるも這は十中二三を拔きたるに過ぎざるべければ該遺稿中に漏れたるも猶ほ多かるべし

▲家藏の一幅 霜落荆門云々の七絶一首を統地に揮毫したるを精巧に表装したるは大本伯遺墨中にも上乘のものなるべし宜なり令嗣遠吉伯が特に表装して家藏せらるるや

▲筆及び筆管 三淵本を見受く孰れも支那製にして就中筆管には細楷を彫刻したるは特に蒼海伯に贈りし所なるを思はしめたり

▲遺愛の唐本 陶淵明集二冊並に同附錄二冊及び屈原集二冊は孰れも唐本なるが屈原集には蒼海伯の自筆にて「楚辭燈」と題し居らる蓋し伯が生存中最も愛讀せられたるなりと云へば伯の好尚を窺ふに足り隨て其人格の高潔清曠なりしを思ふに足れり

▲三葉の寫眞 老後の蒼海、其次齋二先生を追想せしむ、又一葉は蒼海伯が壯年時代の寫眞に屬し衣至肝底の風采を見れば老後の照相の溫平として温なると對照して年所の其人を變化せしむるに驚かざるを得ず

●佐中創立紀念祝典協議

佐賀縣立佐賀中學校に於ては

本年秋季御即位御大典を卜し創立四十年紀念祝典を舉行に付き六月十二日午後二時より同校講堂に於て之が準備委員會を開き左記の事項を協議決定し二十名の實行委員を擧げて之に一任し直に準備に着手せり

- 一、十月三十一日記念祝典を舉行する事
- 一、會員は卒業生、中途退學者、緣故者とし會費は金壹圓とす
- 一、記念雜誌を發行し會員に配つ事
- 一、記念事業として獎學金參萬圓を募集すること

實行委員(順序不同)

副島武熊、岡部達一、中村榮太郎、内田清一、大坪敬通、金武良夫、石井清一、鐘ヶ江東作、吉田光次郎、枝吉順一、黒田龍吉、嘉村彦四郎、清水林吾、須古太郎、倉永源一郎、高島舜逸、大島恒一郎、木下泰三郎、久保源六、家永盛種

●獎學基金募集

佐賀中學校は本年創立四十年に相當するより十一月十日を期し記念祝典を舉行し尙ほ記念事業として獎學基金募集の計畫を立て實行委員數十名を選定せしが右委員は六月廿一日午後三時より同校に會合し種々協議の末愈々左の趣意書を發表して基金募集に着手することとなりたり

獎學基金募集趣意書

榮城の地古來傑士を産す、これ樟樹の亭々たるものあるが爲か曰く然らず將た沃野の茫々たるものあるが爲か、曰く然らず脈々たる葉隠の清泉より湧出する心靈の力、烈々として消ゆる事なき向學の精神、これ其の由て來る最大因由たらずんばあらず近時説をなす者あり、曰く、榮城の學徒其の意氣今や漸く銷沈し向學の精神又將た磨滅し去らん、これ隨に一面の眞理なり然れども吾人が未だ遠に其の説に同する能はざる所以のものは向學の精神日を追うて下層の社會に及び、寧ろ益々激烈の度を加へつ、あるを知らばなり、竊て思ふ、我榮城の人士、過去數十年間、著しく生産の業を輕し來りし結果、駸々乎たる物質文明

の潮流に植することを得ず、今や富の程度に於て、漸く學徒の希望を満足せしむる能はざるものあらん、加ふるに社會は日に月に其門戸を固めつゝあり、凡人も傑士も等しく其當に拂ふべきを拂ひ、履むべき楷梯を履まずんば、斷じて其の扉は開かれざるなり

榮城青春の學徒、是に於てか一大矛盾に達せざるを得ず、矛盾は疑惑を生み、疑惑は輒もすれば意氣銷沈となり、自暴自棄となり、向學の精神は却つて極端なる唯物の精神に墮するなきやを憂ふ。彼等の薄志や誠に悲むべし、具さに社會の狀勢を觀察し、親しく彼等の心情を解剖せば徒に聲を大にするの決して彼等を救ふ所以の道にあらざるを知らん。寧ろ言議を捨て、實踐を擧ぐるの適切なるに如かんや。これ吾人が諸賢に乞うて茲に育英の基金を募らんとする所以なり。吾人の提唱固より何等偉とするに足らずと雖、一は以て學資乏しき學徒に一道の光明を與へ、一は以て先進と後進との間に心脈の靈氣を通じて暗黙の間に彼等の心胸を鳴動せしめ、先進を欽仰する彼等の美點を捉へて其感奮を促すを得、徒に彼等の薄志を罵つて屑しとするものに比し、或はそれに優れるに幾らんか。時や將に母校創立四十年の祝典に遭逢せん、此の擧や以て絶好の記念とすべし。況や時を同うして振古の大典を洛東に拜せんとするや。

若夫れ基金の運用に至つては其要項記して別紙にあり、茲に概して諸賢の賛同を乞ひ、併せて其の示教を俟つや切なり。

獎學基金規程(要項)

- 一、基金總額を參萬圓以上とす
- 二、基金の蓄積は創立以來の卒業生及本校に修學せる緣故者の出金及篤志者の寄附に依る
- 三、出金及寄附金は一時又は三ヶ年以内の年賦納入とす
- 四、本基金を以て佐賀育英會なる名稱の下に財團法人を組織す

五、佐賀育英會の細則は別に之を定む

六、基金の利子を以て左記育英の事業に充つ

- (イ)佐賀縣立佐賀中學校在學中品行方正、身體強健、學業優良にして資力乏しき者に貸費すること
- (ロ)同卒業生中品行方正、身體強健、學業優良にして高等の學校に學入し資力乏しき者に貸費すること
- (ハ)在學又は卒業生の補習教授に要する費用の補助
- (ニ)其他學事獎勵の費用

尙ほ祝典舉行に就ては左の如く協定したり

- 一、十一月上旬祝典舉行(日時は追て通知す)
- 一、十五年以上勤続職員及雇員へ記念品贈呈
- 一、記念運動會及提灯行列舉行
- 一、記念祝宴會
- 一、雜誌發行(記念誌及會員名簿)
- 一、會費金壹圓、八月末日迄に前納のこゝ(期限後は集金郵便に依る)
- 一、記念號及會員名簿は出席の有無に拘はらず會費納入者に配布す
- 一、祝賀會々計と獎學基金とは全く別途とす

●佐賀美術協會寄附募集

佐賀美術協會第二回展覽會は去る七月十五日より十九日迄佐賀縣會議事堂に於て開催せしが今般左記の如く汎く有志家より寄附金を募集しつゝあり

拜啓矣暑の候愈々御清健泰賀候御承知の通り佐賀美術協會は創業日未だ淺きにも係はらず本縣人文の上に多大なる好果を與へ居り候事吾人の均しく認め候處にして今後の發展如何に依りては本縣工藝界への影響も亦甚大なるべく益々隆盛ならしめ度きものに御座候

然る所美術展覽會開催期常に炎暑の候に際し一般觀覽者の入場

も自然と少数に相成り遺憾の至に被存候畢景用幕所持仕らす無縁右の時に相催來り候に付今回新調仕りたく存立候處代金凡金貳百圓相掛り候由にて會員のみにては素より書生の身分何分相任兼候趣尤の儀に候へば此際有志諸君の御賛助を仰ぎ早速青景幕相掛へ爾後年々好季に開會可致被存我々に於ても至極賛成仕り候に付御同情の上何卒多少に不拘御寄附被成下度就ては不日會員幹事の中參上親しく具申御相談可申上候得共先は失禮ながら書中を以て御願まで如斯に御座候 敬白
八月 日 發 起 人 (いろは順)

伊丹彦次郎 穀
狩野雄一 郎
吉田久太郎 郎
中野致明 郎
野口能毅 郎
千住武次郎 郎

●耕地整理補助 農商務省にては耕地整理及び土地改良費條例規則に依り大正四年度に於て同規則第二條第一號及び第二號の補充金其他より交付する旨指令せり

第一號		第二號	
長崎縣	五、九五三圓	山口縣	二、七〇〇圓
山口縣	八、六二〇圓	福岡縣	一、八〇〇圓
福岡縣	一、二二二圓	大分縣	七、〇〇七圓
大分縣	七、〇〇七圓	佐賀縣	七、一五五圓
佐賀縣	一、一五〇圓	宮崎縣	一、八六八圓
宮崎縣	一、八六八圓	鹿児島縣	一、四八四圓
鹿児島縣	一、四八四圓		

●縣下の耕地整理 本縣内務部は「耕地整理概覽」を印刷して發表せり、其内より舊耕地整理に依り發起又は施行認可を得たる耕地整理地區數面積整理費用豫算及反當工事費を郡別(但大正三年未現在)に示せば左の如し

郡名	整理地區數	面積	工費豫算	反當工費額
佐賀郡	一〇	二六、一〇	五、四三三	一、八七〇
神埼郡	五	一七、六〇	三、九〇一	一、三六〇
三養基郡	五	二九、二八	二、三三二	四〇、三三
小松浦郡	八	一七、三三	五、四四二	三、六六
東松浦郡	七	一七、六〇	六、〇五七	三、三三
西松浦郡	三	七三、三三	二五、五五五	四〇、四七
杵島郡	三	二七、〇六	八、〇〇七	三、六六
藤津郡	四	七三、〇三	四、五五〇	三、六六
計	四三	二〇六、二八	七五、四四六	三、一四一

(備考)面積は畝に止め、費用豫算は圓位に止め、反當工費は錢位に止め、孰れも四捨五入として計算す

●實業教員資格認可 左記の諸氏は六月廿一日付を以て公私立實業教員なる資格あることを文部大臣より認可せらる

商船學校航海術運用術教員	有田工校助教諭心得	古賀平太郎
工業校模範型實習教員	豫備役海軍機關少佐	出雲 侃
商船校機關術教員	佐賀商船校助手	光石 恒一
商船校機關實習教員		藤木 康吉
甲種商業校程度の商業校簿記教員		

●神埼郡郷土史完成 神埼郡教育會の事業として兩三年前より着手中の神埼郡郷土史は本年二月完成したるを以て前編、後編の二冊に分ち其裝釘は大隈伯爵著「國民讀本」と同様にて代價は六拾錢に付希望者は同郡の各小學校に申込み周旋を爲す云ふ

●本縣下の大本 御大典記念の爲め植林事業を行ふは最も適當の事なりとし本縣廳にては今回左記注意書を各市町村、學校、社寺、青年團等に配布する事とせり

▲記念植樹に關する注意
聖上陛下御即位の大典記念の爲め植樹事業を行ふが如きは最も適當のことにして記念樹を植栽すべき場所はその樹木を永久安全に生立せしめ以て記念の目的に副ふることを要するが故に常に公衆の目に觸れ易く且保護撫育の周到に行はるべき場所を選定せざるべからず即ち神社佛閣の境内、學校、官公署の構内、公園、名勝地道路、堤塘其他之に類似の箇所を適當とす而して記念樹の種類は本邦固有の樹種にして能く其の地方の風土に適し材質強靱にして風雪の害、虫害、烟害等に對する抵抗力強く生長旺盛にして喬大なる樹幹を形成し姿勢雄壯風致に富み長壽にして永年衰境に入らず而かも價値あるものを選擇するを要す本縣に於て此の要件に適合する樹種はくす、いちのかし、かし、いてふ、まつ等とす

今參考の爲め本縣廳の調査に係る現存大本は地上五尺の幹で周りに一丈以上に達するものは千五百本で三丈以上のものは樟のみに一丈以上八本、四丈以上二本、五丈以上六丈以上各一本なるが一丈以上、二丈以上のものを示せば左の如し

樹種	一丈以上	二丈以上	計
くす	三〇九本	三〇本	三五一本
いちのかし	三五	一	三五
し	二七	一	二七

かたのき	二五	二五
もちのき	一五	一五
やまのき	一五	一五
あがたのき	一五	一五
むのき	一五	一五
えのき	一五	一五
せんだん	一五	一五
けのき	一五	一五
なつら	一五	一五
まづ	一五	一五
いづ	一五	一五
ひのき	一五	一五
かみ	一五	一五
かき	一五	一五
まが	一五	一五
計	一〇〇五	一〇〇五

●小城中學卒業生 縣立小城中學校にては三月二十四日第十二回卒業式を舉行せしが其氏名左の如し

武富義雄○空閑徳平○西岡左運○岸川覺雄○於保佐吉○東島與一○江島信義○古川録郎○杉田菊藏○中島健輔○伊東嘉八○永田安吉○西岡幾太○松本敏男○相川要左衛門○新郷憲治○濱野元一○久間蘭次○甲斐秀三○田中勇夫○土井米次○牧瀬末雄○

野副國次○森永鐵次○中村龜市○田中寅雄○中野琢一○鶴丸源四郎○武富清○森永金吾○吉丸龍市○野中武利○嘉村眞澄○末松爲七○古川義夫○遠藤猪作○中島爲一○南里佐久磨○早田衛○野田泰男○齋藤孝三○大島義補○前山琢磨○田代庸○高塚金次郎○西村良雄○野田辰市○甘平邦夫○梅野實○山口和吉○田中敏夫○大家久一○内柴征雄○峯高一○合六男○轟木喜八○高木伸一○古賀爲次○西山春吉○南里伸一○野田喜由○古賀敏郎○小川桃太郎○松田登○立野辰義

●佐高女校卒業式 縣立佐賀高等女學校にては三月廿六日午前十時同校講堂に於て第十一回補習科修了及第十二回本科卒業證書授與式を舉行せり其氏名左の如し

▲補習科修了生 田中スミ○大坪フサ○嬉野ノブ○吉岡ツヤ○井上コト○山崎キヨ○高柳タマエ○嘉村チサ○深川タニ○村上ヨシエ○大石アイ○長堀千代子

▲本科卒業生 御厨ウチ○大隈スエ○川原カメ○都甲タネ○松本トキ○豆田初音○手塚ツヤ○土橋ミツ○原口ツヤ○飯田美代○矢ヶ部ムラ○中島テイ○秀島コハ○城島ヒサ○倉永ヨシ○江口タネ○尊田マス○大塚アヤコ○深江ミツホ○築地壽磨○宮崎ミサヲ○西村ヨネ○倉永ハル○金丸チカガリ○吉田クニ○古川ハル○西山千代○梅崎トチ○田尻マサ○大坪ミツ○高取タニ○中村タカ○馬渡ジュン○高森トモ○原口タイ○原タツ○村田ツタ○中島ヨチ○吉田チマ○光増キヨ○原田ツナ○米倉キミ○江口キク○荒木ヤス○野村ミツ○西村アキ○小林ツヨ○原田タキ○深川リエ○柿久ヒロ○眞木ツネ○馬郡ヤス○江口タツ○河浪カメ○古賀惠美○久納ツデ○大坪エイ○野田ミヨ○西村フヂ○副島ハル○和田キヨ○納富イノ○重松ハル○石井イト○鷲崎美千代○竹重シノ○嬉野ロク○平尾敦○竹下マキ○古賀ハル○江頭シメ○池田ハルヲ○百田ミツ○内田リヲ○井手デル○緒方キミ○堤フミ○北古賀芳千代○山田トヨ○牧瀬フミ○辻ア

サ○今泉カッ○副島カメ○本村シツ○中根八千代

●農學校卒業式 縣立佐賀農學校にては三月廿二日午前九時より第十五回卒業證書授與式を舉行せり卒業生左の如し

岩瀬榮次○藤生彦九郎○中野次郎○岸川喜久次○實松正雄○中野藤右衛門○古賀藤次郎○中村淺次郎○大丸藤雄○田登一○松原節二○杉町峯次○香月光夫○萩原千秋○大木鹿六○山本五郎○古賀喜治○石橋忠八○永淵正俊○平原竹次○浦川宗直○西村昌雄○森永義一○田中六藏○坂本定助○嘉村正親○吉村正見○伊東重夫○山口喜三郎○重松茂一郎○早田幸平

●佐工學校卒業式 本縣立佐賀工業學校第十五回卒業式は三月十九日舉行されたるが本年の卒業生は三十四名なり

●有田工業卒業式 縣立有田工業學校にては三月二十六日午前十時半より同校に於て第十二回卒業式を舉行せり卒業生及び別科修業生左の如し

▲本科卒業生 生原律雄○大富長太郎○小川富彦○大町近○大串元治○渡邊喜○梶原林○金ヶ江八三○芳野馨○谷川駒藏○牟田正○久間晴次○前田幹三○松崎俊徳○前田頼作○福田岩尾○小柳好○瀬戸口頼助

▲別科修業生 濱田美勝○原繁夫○田中吉郎○小島時次

●鹿島高女卒業式 藤津郡立鹿島高等女學校は三月廿三日午前十一時より第六回卒業式を舉行卒業生氏名左の如し

市原シナリ○稻元テル○石橋テキ○石橋キサ○石井トラヲ○石井ヤス○濱松カッ○橋本リヨ○川崎ムメ○吉田イヲ○吉本田スマ○谷口イチ○田村キツ○中西スグ○中村サク○植松ヤ○植松富美代○井手アキ○納富茂二○太田キヲ○大坪チエ○黒田静○久和原テル○久布白モヲ○山上ヨネ○山口ツナ○山口マスエ○山口ミヤ○山崎エツ○山崎スキ○山下ツル○八澤クメ

○安武サヲ○安田須壽○松尾トミ○松尾テツ○藤家ヲイ○藤木ハル○福地ヨシ○小池タマ○籠ツユ○愛野アヤ○青木エイ○齋藤ツヤ○澤西サヤ○坂井レイ○坂本マキ○貞包スミ○光武ツユ○光山イサ○宮崎クニ○宮崎キク○宮崎スミ○篠崎ヨリ○正寶コト○島本マセ○占野ツツ○本村壽榮○森田ツタ○森田ミヨ○森ミス○水頭ナチ○角キヨ

●武雄高女卒業式 武雄高等女學校にては三月廿七日午前十時より第五回卒業式を舉行せり來賓は鍋島男爵以下知事代理江口縣視學甲斐田郡長其他知名の士數十名ありき卒業生氏名左の如し

江崎ミノ○松本ウキ○中村初音○古川ミヨシ○白根芳根○小島ケサ子○重松ムメ○東島スギ○一ノ瀬ミヨ○村山ミセ○北川キサ○山口トミ○宮地アキ○樋口喜久○納富ツタ○檜崎スミエ○岩崎チカ○古賀テツ○武雄マチ子○藤崎ウキ○鍋島ヤスコ○廣瀬チセ○山田カ子○加々良彌千代○古賀ミツヨ○原シヲ○堤ハル○山崎ツユ○松尾ヨ子○宮崎波津子○中村武代○八坂スエ○中村ソデ○小林キクノ○大串マツエ○田中ツチ○松尾ウヂノ○馬渡タケ○徳永シゲ○相賀淑○神田コト○山下ツシ

リテ○島チヨ○角田ツヤ○角田カド○山田サヲ○坂井トミ○大野キミ○樋口ユキ○樋口タチ○大隈タカ○彌永マス○眞崎ヒデ○牟田レイ○板部ヒサ○香月タニ○大坪キク○増田クイ○大塚タカ○深川タメ○古賀サカ○田原トヨ○宮原松子○蒲原サチ○壽山武千代○持永エン○高島ヌイ○永満コマ○古賀リヲ○古賀鐵○彌富ハヤ○古賀フミ○永淵ミヨ○西川ノブ○鶴丸マサキヨ○松尾ヒロ○村岡ソヨ○徳廣ハツ○金ヶ江ヨウ○牛島キク○坪上ツヤ○相浦ヒサ○岸川ヲヤ○古川秀子○合瀬キク○柴田シヅコ○深海ギン○千々岩トメ○西山マツエ○山下スミ○井上ハル○山田メ○徳永トヲ○川浪ツヤ○西村艶○溝上グヨ○川崎フミ○外山文○尾上コギク○岩永ハツ

●師範校卒業式 三月三十一日午前九時三十分より同校講堂内に於て舉行せり尚卒業生氏名左の如し(順序不同)

●成美高女卒業式 私立成美高女學校第六回卒業證書授與式は三月廿四日舉行卒業生氏名左の如し

井手テイ○宮崎初枝○大申シジ○光石ミヘ○黒田美代○武藤ケラ○川本月輪○副地テル○眞島ハツ○岸川ハマ○北島ユキノ○田中タツ○坂本フチ○中野ヒデ○納富イシ子○秀島トミ子○狩野キヌ○富永モトヅリ○牛島スエ○川崎マツ○堤タカ○田中タカコ○毛利シナ○立石サダ○山田コヲ○大木イソ○北村ツタ○原田ハマ○石井ツモ○八木キク○古賀フサ○永松カッ○坂田シゲ○馬場崎ミカ○鶴崎キヨ○今村ヤス○横尾タミ○鶴丸ツタ○江越エイ○蒲原シヲ○西岡ツサ○古賀ミチコ○北村トミ○三瀬

▲男子部			
氏名	就職校	氏名	就職校
江崎 秀夫(佐賀郡)	武富 淳吉(神埼郡)	中野 善之(小城郡)	
山田 關二(同)	直塚 淳(同)	田中 太三(同)	
城島 武一(同)	吉浦 友作(同)	深川 昌夫(同)	
村島 候種(同)	津山 猪作(三義基)	越谷 常治(東松浦)	
松石 太郎(同)	宮原 佐一郎(同)	渡谷 武夫(同)	
高橋 善吾(同)	古賀 道男(同)	有馬 秀次郎(同)	
小田 穰(同)	中野 四郎(同)	隈本 常藏(同)	
武本 勇(同)	大坪 司馬男(同)	松尾 繁三(同)	
内田 榮作(同)	江口 清彦(小城郡)	井之 玄妙(同)	
中村 伊八(同)	秋永 末吉(同)	黒岩 政末(同)	
福岡己之吉(同)	下川 慶次(同)	青木 利重(同)	
中牟田要作(神埼郡)	永淵 新六(同)	野中 靜馬(同)	

白水	鶴吉(東松浦)	松尾	又六(杵島郡)	小川	七次(藤津郡)
坂口八百治(同)	山崎	富一(同)	木下	義猷(同)	
城	涉(同)	西田	長雄(同)	織田	寅松(同)
田中繁太郎(西松浦)	本村	又雄(同)	小林	秀一(同)	
庭木彌之助(同)	山下	一雄(同)	本山	辰二(同)	
大串	爲市(同)	溝口	隆一(同)	森田	耕一(同)
山口	勝次(同)	小野	勝郎(同)	野田	安市(同)
川内	金護(同)	岩永	覺二(同)	山口	孝義(佐賀市)
島津	寛二(同)	田中	清次(同)	瀬戸	清平(同)
鶴田	卯一(同)	金丸	辰一郎(同)		
▲女部					
松田	タツ(佐賀郡)	岸川	愛子(小城郡)	久保	フチ(西松浦)
徳久	アサ(同)	馬渡	イマ(同)	中幸田	ヒフ(同)
山口	マツ(同)	野中	トシ(同)	古川	ウタ(杵島郡)
渡邊	イソ(同)	小林	ヨシ(同)	山口	文世(同)
山田	テル(同)	平野	ユキ(同)	大曲	アヤ(同)
堤	タヨ(同)	黒瀬	チヨノ(東松浦)	東島	ハマ(同)
松川	スカ(同)	古川	イソヨ(同)	田中	フシ(同)
三好	ハツ(同)	小柳	ツル(同)	安武	ヒロ(同)
納富	サカ(同)	柴垣	八千代(同)	武藤	フナノ(同)
内田	エキ(神埼郡)	梅田	スエノ(同)	田代	エキ(同)
大森	カト(同)	古市	イト(同)	田中	ミキ(藤津郡)
荒木	ユイ(同)	宮崎	フクチ(同)	林野	クマ(同)
城島ヨシノ(同)	岸田	トメ(同)	大曲	キサ(同)	
迎	ヌイ(三養基)	谷生	シズ(同)	江原	シカチ(同)
西村	ヨイ(同)	石丸	ミツ(西松浦)	大塚	タツ(同)
今村	コトチヨ(同)	小西	ミエ(同)	光岡	照(佐賀市)
飯盛	サミ(同)	嘉村	ユメ(同)	山村	ヒデチヨ(同)

▲甲種講習科(尋正)

平山 支吾(佐賀郡) 江口 繁(小城郡) 古川 鶴雄(杵島郡)

野田 兵一(同) 中原 繁作(同) 松尾 勝次(同)

吉富 廣次(同) 福田 茂(東松浦) 山崎 芳男(同)

中村 幾市(神埼郡) 原 新(同) 浦郷 繁一(藤津郡)

成澤 榮一(三養基) 徳田 正次(同) 柳川 佐藏(同)

牛島 啓太(同) 鶴池 清次(同) 荒谷 儀八(佐賀市)

平山 孫太(小城郡) 塚原 正基(同)

●久留米佐賀輕鐵 佐賀、福岡兩縣有志の發企にて佐賀久留米間輕軌道株式會社を設立する事となり三月三十日久留米市に於て發起人會を開き株式募集其他を協定したり該軌道は資本金三十二萬圓一株五十圓總株數六千四百株を佐賀側に半數築後側にて半數募集すべし

工事設計書に依れば久留米市瀬下町の筑後川豆津橋を起點とし佐賀縣佐賀郡神野村大字神野を終點とし九鐵佐賀驛に聯絡し此延長十二哩二十鐵とす

●神埼農産學校設置認可 神埼郡にては郡立農産學校の設置を文部大臣に申請中の處左の如く認可ありたり

文部省告示第七十號

佐賀縣神埼郡西郷村に農産學校規程乙種組織に依り佐賀縣神埼郡立神埼農産學校を設置し大正四年四月より開校の件認可せり

大正四年四月一日 文部大臣法學博士 一木喜徳郎

●諸先輩招魂祭 四月十三日は明治七年の役にて斷頭臺の露を消えし江藤南白、島義勇其他諸先輩第四十二回の招魂祭は川原名官祭招魂社畔の諸先輩諸氏の碑前に於て舉行せり先づ午前十一時より齋主半田口義清外六氏の壯嚴なる祭式あり遺族江藤冬雄中川藤太郎、村山長章、堤長定氏を始め數十氏及び有志者側には石丸勝一、坂本規貞氏等二十餘名參列玉串を捧げ式後社務所に於

て御酒開きを爲し折詰にて午餐の饗應ありたり

●嗚呼江副佐賀新聞社主逝く 佐賀新聞社々主江副靖臣氏は四月廿四日午後二時十五分一族知友に圍繞せられいゝ安らかに永別の涙を吞みて永久の眠に就けり是より先危篤の報に接し令嗣巽氏は夫人令息と共に同廿日佐世保軍港より村上夫人(長女孝子)は去廿三日返りより島岡夫人(二女友子)は同廿日垂水より親戚衆松正人氏夫妻は同十七日朝鮮より何れも歸省看護せられ江副氏は重態ながらも笑を浮べて大に満足せられたるが唯一刻千秋の思にて一同の待ち詫びしは野日藤三氏(江副氏の甥)にして正副氏も亦念頭にかけられしが野日氏は東京より同日午後二時着佐し餘命今や分刻に迫りたるも存命中に面會するを得たり斯て哀愁の雲は深く綠濃き邸宅を鎖し計音飛びて公私の弔客踵を接せり

●與賀神社の銘刀 市内與賀神社の寶刀銘三尺物は今回古社寺保存會委員松平子爵鑑定の結果康光作中の傑物ならんこの事にて特に調査の必要あり近日文部省保存會へ提出を命ぜられたり

●泥猴魚の御買上 五月初旬宮内省より石橋本縣知事宛本縣產泥猴魚御買上の御下命ありしを以て直に佐賀郡南川副村大井道漁業組合理事久保幸一より御買上の手續をなし鐘ヶ江水産技手は之を携帶東上し上納をなしたり因に畏くも 聖上陛下には東宮に在せらるゝ砌り本縣下へ御行啓ありし其際泥猴魚を台覽に供せしが殊の外御嘉賞ありしやに拜賞するが再び御買上の御命に接したるは獨り泥猴魚のみならず本縣水産上の無上の光榮と云ふべし追而泥猴魚は本邦西南海區に産あり大なるものは五寸を越え體形鯨魚に似たれども體色暗褐色にして斑點あり殊に脊鰭及尾鰭に多く青點を加へ恰も飛白を着たるが如し上下顎には三四の尖銳なる齒を露出し眼珠稍突出し稍々運動せしむるを以て瞬をなすが如く一見奇異の形態をなせるを以て之を嫌ふもの多し中鹹水分にして泥地に産す冬期は泥中に潛伏し夏期は濁泥上に匍行運動す性活潑

にして食食なり七八月の候産卵す本縣は特産地にして鹽漬にも夏產あり肥後産の如きは殊に大なりと雖も味ひ美ならず此の魚は夏期食用魚にして新鮮なる且つ美濃熟れにも適し脂肪に富み一種好愛すべき味を有し食慣れたるものには殊に賞味せらる

●中村喜一郎氏逝く 我化學界に渺からず貢獻せる舊佐賀藩士中村喜一郎氏は年來の宿病を東京牛込區辨天町五三の自邸に靜養中五月十一日午後六時半遂に逝けり、年六十六、氏は明治六年佐野伯に從ひ國博覽會に出張し後獨逸に留學して化學を專攻歸朝後正院に奉職次で京郡府に轉任更に工部大藏の兩省に歷仕する事十三年明治二十年官を辭し府下八王寺染織學校、十日町染織學校等に校長たる各十二年、此間各地織物共進會の審査員を囑託さるゝ事數十回、著書亦數種あり、令嗣光吉氏は現に朝鮮銀行大連支店長たり因みに葬儀は同十四日午後二時葬列を廢し府下豊多摩郡雜司ヶ谷共同墓地にて執行せり

●巡回文庫成績 四月中に於ける佐賀圖書館巡回文庫の成績は閲覧人員千九百四十二人、貸付圖書冊數二千三百三十四冊にして内譯すれば左の如し

▲福富文庫 二五〇人 三四六冊

▲古枝文庫 一〇二人 一八六冊

▲蓮池文庫 二〇四人 二〇三冊

▲嘉瀬圖書 四八六冊 四九九冊

●國寶調査 文部省古社寺保存會委員新納忠之介氏本縣下に於ける既指國寶(佛像)の修理設計及新に指定すべき物件調査の爲め五月十一日より十七日迄出張せられしが修理設計を調査されし既指定の國寶は杵島郡武雄町臨濟宗、廣福護國禪寺の木造四天王立像四軀、藤津郡能古見村大字山浦眞言宗蓮嚴院の木造本尊藥師如來坐像一軀同寺木造阿彌陀如來坐像二軀佐賀郡春日村大字久池

井、臨濟宗、高城寺の木造圓鑑禪師坐像一軀、神崎郡三田川村大字田手眞言宗東妙寺の木造本尊釋迦如來坐像一軀、同寺木造聖觀音立像一軀にして新指定物件調査のものは藤津郡三ヶ寺佛像廿九軀（外に小佛像數十軀）、神崎郡八ヶ寺佛像九十九軀（外に小佛像廿九軀）、基郡一ヶ寺佛像數軀、小坂郡三ヶ寺佛像十七軀（外に小佛像數軀）なり、其の中製作最も優秀にして國寶の價值あるものと撮影せしものは左の如し

藤津郡鹽田村大字馬場下眞言宗常在寺

一、木造本尊藥師如來立像（丈二尺三寸）凡そ七百年前のもの
一、不動明王坐像（丈二尺一寸七分）凡そ七百年前のもの
神崎郡東春振村大字松隈天臺宗修學院

一、木造本尊不動明王立像（丈三尺）凡そ五百年前のもの

●黒田工學士逝く 神崎郡蓮池村出身工學士黒田孫一氏は肋膜炎に罹り六月廿四日相州七里ヶ濱の療養所に於て逝去せり氏は佐賀中學校卒業後は熊本高等學校、東京帝國大學工學部大學を卒業して四十一年工學士となり續いて横濱電氣株式會社の技師に聘せられ同社の箱根塔ノ澤發電所に勤務せしが不圖病を得遂に起たざるに至るなり享年三十三、少壯有爲なりしに惜むべし

●奥女中表彰せらる 東京本郷區本富士町前田侯爵家に三十餘年間仕へたる奥女中藤山絹子（七十一）は七月三十日死去せるが之れより先廿八日を以て井上東京府知事より左の如く其善行を表彰せられたり

元佐賀縣士族 藤山 絹子

資性温良品行方正明治三年舊藩鍋島家の命に従ひ其の良人愛子と別れ同家に仕へ哺乳の任に當る十有餘年其の哺育せし娘前田侯爵夫人たるに及び隨つて侯爵家に侍し爾來職を奥女中に奉ずる事爰に三十餘年其の間主家の休戚を心頭に懸け自家の利害は之れを度外に置き至誠以て其の職に服し或は疾病を以て

勤務を曠廢せず年既に七十二にして其の兒童の家に安逸するを欲せず却て奥女中を統轄し主家に仕ふるを樂みとなす故を以て主家の信頼も亦厚く奥向の家政圓滿ならしむるものは其の行爲洵に奇特に候事
大正四年七月廿八日
東京府知事從四位 勳三等法學博士 井上友一

●谷口清八氏逝く 本縣實業界の重鎮

佐賀市長瀬町谷口鐵工場主谷口清八氏は五月中旬より神經痛に罹り自邸に於て靜養中なりしが六月十一日愛息泰造氏を喪ひてよりは殊に鬱々として樂まず悲痛の極精神にも異狀を呈せる微ありしが遂に十六日午前四時半溘焉として逝く享年五十有餘

▲奮闘の生涯 氏は慶應二年生れ先代清八氏の長子源一郎と稱し明治四十四年八月先代清八氏の逝くや清八氏を襲名して谷口家十三代の主となる、三百五十年の久しき谷口清左衛門長光の後を承けて鑄物師たりし谷口家も明治初年酒々として洋式機械製作業の潮流内地工業界を侵潤するや谷口家も其の餘波を受けて需用急減祖先傳來の業も遂に抛たざるべからざる如き窮厄に遭へるが、其の轉軻不遇の秋に人となる源一郎氏は先代清八氏を輔けて其の片腕となり事業を既倒に挽回せんとし熱慮斷行、工業界の趨勢は全く機械工業にあるを看破し明治十五年一大規模の工場たらしめんとして先づ谷口鐵工場を創設し父子協力一致清八氏は外に出て之を監督し業務を督勵しつゝ奮闘三十有餘年遂に今日の大をなせり氏の生涯は徹頭徹尾勤儉の行社會文化に従つて傳來の鑄物師として世に立つべからざるを悟り自ら進んで學理的的研究を以て大に飛躍すべく實力を養成せんとし學を修め工部大學に入らんとする際惜しい哉腦患の犯す所なり志を挫く止むを得ざるに到れり、雖も却て一大決心を固め實地研究の途に就く事となり爾來十有餘

なるが現在の僥同家々業を繼承したり

▲故人の一家 未亡人をみこ子（四十一）は佐賀郡北川副村木原神代氏の女にして故人との間に早稲田在學中の長男亮一（二十）佐賀中學在學中の忠二（十八）淳三（十六）及び靈助（七歳）の四男幸（廿二）廣子（九歳）八重子（二歳）の三女あり氏は代々熱心なる蓮宗信者にして清八氏は特に信仰篤く酒を嗜まず煙草を吸はず一切の娛樂遊技を却けて只家業に生命を傾注し模範的實業家を以て敬仰せられ居たり葬儀は六月二十日長瀬町奉教寺に於て執行せられたり

●堀田伯試驗場參觀 九州其他各縣に於ける産業視察の爲め來縣なる堀田伯は入江陣内利武の兩氏を隨へ六月一日午後本縣農事試驗場へ來場本縣産業狀態に就き詳細調査されたる後船山場長の案内にて場内を參觀せられたり

●化學染料發見 元工業學校教諭古賀儀一氏は多年植物性染料につき研究中なりしが去る三月學校を辭し専心研究に身を委ねし結果今回（コガ、レッヂ、シ、ウアイ、オレン）なる一種の染料を發見せり該染料は直接に絹、羊毛に容易に小豆色に染色することを得る由にて特許を出願せし由なるが目下染料輸入杜絶の折斯かる發見は斯界の福音と云ふ可し（六月八日）

●海軍兵學校志願數 本年度海軍兵學校志願數二二五九の内本縣人八二あり其出身中學左の如し
佐賀中學二九、小城中學一五、鹿島同八、唐津同六、私立龍谷中學二、東京其他二二

●宮殿下御招宴 閑院宮大將殿下に於ては六月一日午後六時より内庫所に於て當地方各官公衙の幹部并將校の重なるものを御招宴遊ばされ優渥なる御誼を賜はり何れも其光榮に感泣したるが席順左の如し
東 床

雜報

殿下 鍋島令嗣 谷口福岡縣知事

北 側 長尾九管局長 福田少將 石橋佐賀縣知事 阿部檢事正 長野

福岡縣内務部長 小平運輸課長 渡邊警察部長 西尾中佐 二

木警察部長 佐藤佐賀郡長 那須憲兵中佐

廣瀨大尉 中野鍋島家々扶 野口佐賀市長 原二等主計正 岸

本内務部長 稻澤檢事正 中島騎兵大佐 西野佐賀地方裁判所

長 長谷川少將 青木少將 能勢福岡裁判所長

●有難き御言葉 閑院宮殿下御當地御滞在の折六月一日御

旅館なる内庫所に於て當地各官公衙の幹部に御招宴を賜はりた

る後殿下には特に野口市長を御座近く召させられ

予が來佐に付市民が齎しく歓迎の意を表せしは御苦勞に存する

處にて且又市よりは綏通を又諸有志より種々の物品を寄送され

し事は深く感謝する所なる故一般に宜しく傳へ呉れよ

との意味の有難き御言葉を賜はり野口市長は感激して御前を退出し

たり

●停車場改良費 鐵道建設改良事業十三年計畫に伴ひ改良

を要すべく停車場名及改良費の各停車場配分額の内本年度より工

事に着手すべく停車場及本年度内に支出すべき豫定費額の内佐賀

縣の分左の如し

▲鳥栖二萬圓▲中原二萬七千圓▲肥前山口三萬四千圓▲武雄二

萬七千圓

●縣會議員候補者結果 五月六日執行せられたる三養基、

小城兩郡に於ける縣會議員補缺選舉の結果左の如し

▲小城郡 二千三百四十二票 當選 石川 三郎

▲三養基郡 千三百八十二票 當選 木下 十四三

同 落選 佐久間 十造

東京帝國大學卒業生

本縣人及其住所左の如し

●法律學科(英法兼修) 東松浦郡唐津町 草場 實治

同(佛法兼修) 佐賀市水ヶ江町 小林 四郎

同(獨法兼修) 杵島郡北方村 田中耕太郎

同 藤津郡鹿島町 南 正樹

同 佐賀市與賀町 橋本恒五郎

同 杵島郡福治村 中村榮四郎

同 同郡北有明村 森 富三郎

同 神埼郡 鶴比 佐志

同 佐賀郡鍋島村 高木 八尺

同 佐賀市西田代町 多 久安

同 三養基郡基山村 寺崎 英雄

同 佐賀市赤松町 板谷 喜代一

同 同 西田代町 早田 政憲

同 西松浦郡牧島村 川 副 隆

同 佐賀郡久保田村 鶴 九郎

同 神埼郡三田川村 行 德三郎

同 佐賀郡高木瀬村 深 川 爲一

同 杵島郡大町村 千 綿 榮六

同 佐賀郡久保泉村 山 本 平吾

同 小城郡南多久村 石 志 友二

同 佐賀市與賀町 田 口 秀雄

同 杵島郡六角村 大 串 義六

同 林學科

同 農藝化學科

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

同 法律學科(英法兼修)

同 農科大學

同 政治學科

同 經濟學科

同 商業學科

醫學科

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

同 醫學科大學

●關西大學卒業 本縣人は専門部法律科宮崎卯一
●大阪高等工業校卒業生 機械科岩本忠藏、醸造科中尾芳彦、古賀一郎

●重砲兵射撃卒業 陸軍重砲兵射撃學校乙種學生卒業本縣人左の如し
砲兵中尉下村千秋、鶴田一二、同少尉木下秀清

●早稲田大學卒業生 今回早稲田大學卒業生は總數七百五十二人なりしが其内本縣人は左の如し
▲大學部政治經濟科 橋本貞一 福島庚 福田政美 田中亮一
▲同英文學科 古館清太郎
▲同商科 川原光次 古賀良雄 北島利八 木原新 末永寛
▲同理工電氣科 牛島寅生
▲專門部政治經濟科 渡瀬保治 坂本隆二 江島竹彦
▲同法律科 吉田五郎 末岡秀司 古賀權六 名古屋直治郎
▲高等師範部國漢歴史科 小笠原悟 古賀權六 名古屋直治郎

●山口高商卒業 中島理一、松隈政憲、永島沖太郎、福岡善三郎

●中村中尉飛行卒業 歩兵第五十五聯隊歩兵中尉中村順平氏は今回第三回卒業飛行を終り飛行免狀を得たりと

●經理學校卒業 ▲第六師團青木政一 ▲第十一師團井上米雄、中島安一 ▲第十八師團三浦信一

●私立熊本醫專卒業生 於保龍生、黒田豊作、太田二也、太田太助、福地國次郎、松永果、中溝清明、平塚良造、本村恒雄、陸軍依託生今村米次郎

第七師團歩兵第二十五同 同第二十七同
第十師團輜重兵同十大隊 同十一師團工歩同十一大隊
同十二師團歩兵同四十七聯隊 同二十四同
同二十四同 重砲兵同六同
同十三師團野砲兵同十九同 同十五師團騎兵同十九同
同十六師團歩兵同十九同 同十七師團歩兵同四十二同
同十七師團歩兵同四十二同 同同 五十四同
同同 二十一同
同十八師團歩兵同五十五同 尚ほ當聯隊附にして他縣人左の如し
柿原榮藏○美田千賀藏○岡田茂○吉武秀人○河南三蘇男○柳寛熙○中馬長彦

●士官候補生任命 陸軍中央幼年學校本科卒業生二百七十五名は五月二十八日士官候補生を命ぜられ各隊に配賦されしが内本縣人は左の如し
▲近衛師團歩兵四聯隊鍋島茂廣▲三師團歩兵六十八聯隊渡邊凱夫▲六師團歩兵十三聯隊久米眞多男▲同六十四聯隊中島忠雄▲十一師團歩兵四十四聯隊吉村喜三▲同野砲兵十一聯隊中野良次▲十二師團歩兵二十四聯隊中島房雄▲十五師團歩兵十八聯隊小川伊佐雄▲工兵十五大隊山崎熊六▲十八師團歩兵四十六聯隊音成五一▲同野砲兵二十四聯隊北島護六
尚ほ佐賀聯隊附他縣人左の如し

入江才次郎 安永篤次郎 遠谷弘 古賀登代一 原田次郎 寺町俊一 小部政一 古田建一 山田次六 古賀龍一 松本安次郎 野口安次郎 綾部鎮馬 辰巳榮一 古賀辰雄

職失伍郎○高村繁雄
●海軍機關學校卒業 海軍機關學校機關大尉大石平次、同大尉横尾道春の兩氏なり

●藥劑師試験及第 本縣人栗原九十郎氏は今回第一回藥劑師實地試験に及第せり
師實地試験に及第せり
●蹄鐵術卒業 臺灣山砲兵第二中隊砲兵二等卒中山勘兵衛氏は今回蹄鐵術を卒業せり
は今回蹄鐵術を卒業せり

●醫術開業試験及第 本縣人藤川義謙氏は東京に於て施行の第一回醫術開業試験に及第せり
●熊本高等工業學校第十回卒業生 ○土木工學科草野弘○諸岡明七○中村又一(修業)○機械工學科中村利八○松村鐵六○松永新藏○東島徹藏○探礦冶金學科市原源之助○吉田傳作○久米一八○前山實一○古川彌六

●海軍機關校生徒採用 幸田菊雄、宮崎幸武、岸川覺雄
●醫術開業試験及第者 本縣人小木曾鉦三、江頭泰輔二氏は同試験に及第せり
●裁判書記試験及第 過日宮崎地方裁判所に於て舉行せし裁判書記登用試験に及第せし本縣人は左の如し
諸熊政市○石井秀夫○武藤勝次

●小學校教員無試験檢定 本縣にては六月十五日付にて左の如く小學校教員免狀を授與せり
▲本科正教員 世戸末吉
▲尋常本科正教員 永瀬勝一、庄野クニ、山下シナ、楠村ハツキ、小島居リツ、青木ソヨ、樋渡千代
▲小學校准教員 鶴田滿治、立野辰義、緒方嘉平、諸石信正、

●醫術開業試験合格 各地方(東京を除く)に於て施行の本年第一回醫術開業後期學說試験に合格せし本縣人左の如し
田代逸見○東次八○吉中勘三○古川岩松

●教員免許狀授與 小學校教員無試験檢定に依り五月一日附小學校教員免許狀を授與せられたるもの左の如し
尋常小學校本科正教員免許狀
古賀直太郎○小宮實治○張ミエ○重松トセ○廣江シモ○宮原ナル○吉村フク○居石八千代○篠塚リエ○原ツル○田中シヅヨ
小學校農業專科正教員免許狀
中尾辰次○吉村清次郎
小學校准教員免許狀
中島テイ○江口キク○小林ツヨ○眞島ハツ○川崎ハヤ○長縁寺ケン○島本マセ○宮崎スミ○本村壽榮○眞包スミ○松尾テツ○板本マキ○濱松カツ○山上ヨチ○川崎ムメ○吉田イヲ○古賀サミ
尋常小學校准教員免許狀
谷田マチ○吉村清次郎○杉本キク○中江新一○小松マツエ
●獸醫免許試験合格 本縣人古賀郡一、下安一兩氏は今回獸醫免許試験合格せり

●士官學校卒業 陸軍士官學校第二十七期生徒七百六十名は五月二十五日卒業せしが内本縣人左の如し
第一師團歩兵第一聯隊 同第十五同
第二師團歩兵第二十九同 同第十八同
第六師團歩兵第十六同 同第二十三同
野砲兵第六同

樋口敬七郎 田古里直 黒田榮次 秀島正夫 布上照一 江口八郎 東眞六

論説

雜報

一三三

原田ツナ、緒方キミ、野村ミツコ、大隈スエ、吉田クニ、大野ミキ、北村ツタ、原田ハメ、野中アイ、増田クイ、犬塚タカ、副島マキヨ、落合可、江口ツカ、竹下テル、増田ツキ、松尾シヅ、西村チサ、橋本リヨ、馬場アリ、石橋キサ、植松富美代、山崎エツ、熊谷クミ、久我ツチ、古賀ミツエ、西村治和

●東京美術學校入學 ▲日本畫科鍋島紀雄▲西洋畫科武藤辰平

●東京音樂學校入學 本縣人山下テイ女は今回東京音樂學校へ入學せり

●醫術開業試験合格 東京に於て施行の本年第一回醫術開業後期學說試験に合格せし本縣人は御厨勇四郎、坂井時章、小木曾鉦三、江頭泰輔の四氏也

●東京高工入學 機械科大川二郎、電氣科中村孝

●旅順工科學堂入學 白石眞、野田喜三郎(以上機械工學科)副島雄次(電氣工學科)武富吉雄(探礦冶金學科)の四氏

●京都高等蠶業學校入學 松本清

●外國語學校入學者 東京外國語學校入學を許可せし内本縣人如左 ▲露語學科 今村賤夫▲支那語學科 岩永徳一、藤生安太郎▲朝鮮語學科 藤松常三郎▲英語學科 中島鏡次▲佛語學科 伊丹猪三郎▲獨語學科 山本爲造▲支那語學科 樋口頑市

●五高入學者 ▲第一部甲類石井龍雄、馬場判三、西村雄太郎、田中仙八、野口欽一、山口征夫、松尾敏行、溝口熊太郎、美間坂剛太、森義雄

▲第一部乙類西川廣宣

▲第二部甲類川上満義、早田宮太郎、副島雅次(無試験、鍋島茂空閑徳平、古川勇、古賀經美、葛浦公義、莊島秩男、東島與一

▲第二部丙類中島健輔

▲第三部池田豊、布上正則、武富義雄、中幸田與八

▲大學豫科入學 ▲第一高等學校 第一部甲類梁井淳二、

●神戸高商入學 東島健兒氏(豫科第二部)

山口商高入學 西岡義太(西傳)八浪嘉一(丸山憲之

●文官普通試験合格 三月一日施行の沖繩縣文官普通試験に合格せし者の内本縣人は多久島萬市氏一人なり

●東北帝大入學 本縣人中島寛氏は今回東北帝國大學工學專門部機械工學科へ入學を許可されたり

●射撃學校入學 陸軍砲兵大尉石井十郎氏は陸軍野戰砲兵射撃學校第二回乙種學生として四月一日入校せり

●廣島高師入學 本縣人佐藤憲太郎氏は廣島高等師範學校に入學を許さる

●步兵學校卒業 陸軍步兵學校は去廿四日修業式舉行、本縣人左の如し

步兵歩兵大尉宇都宮三千雄、同尉浦原小平、牧瀬忠能、中幸田基、空閑昇

因に宇都宮大尉は成績優等に付銀時計を下賜されたり又佐賀聯隊附步兵少佐 星野文一郎、同中尉石牟禮平四郎氏も同時に卒業せり

●獸醫並蹄鐵工免狀下附 去一月より六月迄に免狀下附されたる本縣人左如し

獸醫 山口常次、峰下政治、江崎駿郎▲蹄鐵工 前田清太郎、中島松一、有家傳助、力武政藏、檜田鐵太郎、下安一

●蹄鐵術卒業證書付與 野砲兵第廿四聯隊に於て蹄鐵術卒業證書を付與せられたる本縣人左の如し

砲兵二等卒上野伍八、西久保清、吉原庄吉、宮崎林一、小出格次、同一等卒山崎龍一

●教員免狀授與者 小學校教員無試験檢定に依り七月三十一日教員免狀を授與せられたるは左の如し

▲尋常小學校正教員 山田トシ、戸田ミチ、相良輝次

▲小學校准教員 森ミス、稻元テル、森田ツタ、古賀ヨウ

▲尋常小學校准教員 山崎勇太郎、深川ソチ、宮原俊雄、關本茂代、横尾サヨ

小學校教員試験檢定により七月三十一日小學校教員免狀を授與せ

し者左如し

▲尋常小學校本科正教員 遠江八郎、井上源太郎

▲小學校專科正教員 農業 福永信太、裁縫 牧野シヅエ

▲尋常小學校准教員 白濱理三

●六高入學 第一部乙類志波俊夫、第二部甲類浦原重雄、第二部丙類西岡勝次、第三部生場松長夫

●二高入學 第二部丙類齋藤省三

●三高入學 ▲第一部甲類江口胤顯▲第一部丙類向井新▲第一部丁類小林安高▲第二部甲類中島米治郎

●鹿兒島七高入學生 ▲第一部甲類神崎崎遼、木下好太郎

▲第三部大坪豊、吉田鐵雄、中島又吉、東小一

●東北大學入學 東北帝國大學農科大學に於て入學許可の佐賀縣人は左の如し

大學豫科 馬場爲二、西岡勝次、浦地正、中尾勇

水産學科 中島助作、遠藤猪作、平野太郎

●士官候補生採用 藤松達次、野口欽一、伊東祐親、山田與吉、宮崎幸武、大塚英比古、山口隼夫、松永光次、相川要左衛門、犬塚一馬、岸川寛雄、波多披、立石雄太郎、榎林太夫、藤崎速見、松尾常吉、吉村馬三、吉丸儀六、於保佐吉、光武秀次、野口義勇

●鹿兒島高等農林學校入學者 成富篤

●岡山醫學專門學校入學者 安本和夫、於保恭造の二名